

『真実摂経』「金剛界大マンドラ」章所説の大印の実践

— Preliminary Edition, 和訳註, および内容分析 —¹

種村隆元

1 はじめに

1.1 『真実摂経』と四印

筆者は、近年インド密教の諸実践におけるアーヴェーシャ (āveśa, 憑依) の果たす役割, 特に『真実摂経 (初会金剛頂経) *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*』(以下, STTS) およびその関連文献の説く実践におけるアーヴェーシャの占める位置について研究を進めている。本論文は, STTS 第1章「金剛界大マンドラ」所説の四印, 特に大印をアーヴェーシャとの関わりの中で論じることを目的として, 当該章の大印に関するセクションの校訂テキスト, 訳註, ならびに内容分析を提示するものである。

それに先立ち, このイントロダクションにおいて STTS 「金剛界大マンドラ」章において, 四印の実践がどのように位置づけられているのかを検討していきたい。以下に示すのは, 当該章の構成である (種村 2020 も参照)。

1. 序分
2. 瞑想実践 (三三昧)
3. 灌頂
4. 四種類の成就が生じるための印に関する智
5. 四印に関する智

¹ 本論文を執筆するにあたって, 倉西憲一 (大正大学), 加納和雄 (駒澤大学), 伊集院栞 (東京大学大学院) の三先生 (順不同) より貴重なご意見を頂いた。ここに謝意を表する次第である。尚, 本論文のいかなる誤りも筆者自身が責任を負うものである。

6. 補足規定

すでに種村 2020 で指摘しているように、瞑想実践はアーヴェーシャを引き起こし、マンドラとの合一を果たす実践、灌頂は入門候補者にアーヴェーシャを引き起こし、質的転換をもたらす儀礼、「成就が生じるための印に関する智」は、アーヴェーシャを諸実践へ適用する方法、そして四印は実践者がアーヴェーシャを引き起こす方法を説いている。

「四印に関する智」のセクションは、Ānandagarbha の註釈書 *Tattvāloka* *karī* を参照するならば、内容的に以下のようなシノプシスを提示することができる。

5. 四印に関する智 (H250–H298)
 - 5.1. 大印 (Mahāmudrā) (H251–H262)
 - 5.1.1. すべての如来である存在を成就する手段としての大印 (Sarvatathāgatasattvasādhana mahāmudrā) (H251)
 - 5.1.2. 金剛薩埵を成就する手段としての大印 (Vajrasattvasādhana mahāmudrā) (H252)
 - 5.1.3. 金剛王等を成就する手段としての大印 (Vajrarājādisādhana mahāmudrā) (H253)
 - 5.1.4. 大印の成就法、成就、働き (Mahāmudrāṇām sādhanam siddhiḥ karma ca) (H253)
 - 5.1.4.1. 大印成就法儀軌 (Mahāmudrāsādhana vidhiḥ) (H254–H255)
 - 5.1.4.2. 大印の成就 (Mahāmudrā siddhiḥ) (H256)
 - 5.1.4.3. 大印の働き (Mahāmudrā karma) (H256–2–H262)
 - 5.2. 誓戒印 (Samayamudrā) (H263–H277)
 - 5.3. 法印 (Dharmamudrā) (H278–H284)
 - 5.4. 行為の印 (カツマ印) (Karmamudrā) (H285–H298)
 - 5.5. 四種類の印に共通した規則 (H299–H300)

今回、校訂テキストおよび訳註を提示し、内容を検討する箇所は、「四印に関する智」セクションの冒頭から、「5.1.4.3. 大印の行為」までである²。引き続き箇所は、紙幅の関係上、別の機会で論じることにした。

Ānandagarbha や Śākyamitra の註釈書によれば、当該セクションは、直前の「成就が生じるための印に関する智」と内容的には連続しており、実践者が望む成就のタイプにより、さまざまな実践が用意されていたことが想定される。また、これらの四印はかならずしもセットで用いられるものではなく、個別の印の成就にも言及されている。さらに、経典に対応する実践次第は、STTS の他の場所で説かれている実践 (例えば 5.5 の共通規則) が用いられており、その意味において、シノプシスに示している各項目は、一種の儀礼ユニットであり、それが必要に応じて組み合わせられ使用されることが見て取れる。

以下、上記のシノプシスで示した STTS 本文が、実践マニュアルで規定されている実践次第とどのように対応するかを見ていきたいと思うが、その前に、STTS における四印がどのように定義あるいは説明されているかを見ていきたい。

1.2 四印の定義

STTS の説く四印に関するまとめた説明が見られる文献は、すでに先行研究において指摘されているように、Buddhaguhya の *Tantrārthāvatāra* である (北村・タントラ仏教研究会 2012: 72ff., 壁瀬 1957)。以下、*Tantrārthāvatāra* における説明を見ていきたい。まず、大印に関しては以下の様に説明されている。

² 上記シノプシスのうち、5.1.2-5.1.4.2 を取り扱った論文として高橋 1996 がある。当該論文では、註釈書を参照しつつ非常に綿密な検討がなされているが、本論文ではあえてアーヴェーシャを視点に再検討を加える次第である。また、STTS の内容構成に関しても、本論文は高橋 1996 とは異なる見解を提示している。

Tantrārthāvatāra: de la lha'i sku'i gzugs brnyan ni phyag rgya chen po ste | ji ltar zhe na 'dra ba'i phyir lha de dran pa'i rgyur che bas na phyag rgya chen po zhes bya'o || (P f.6v2, D ff.5r7-5v1)

【和訳】「それら〔四種類の印〕のうち、尊格の身体の影像が大印である。なぜ〔そのように言えるのか〕というならば、〔尊格の身体と〕類似しているから、その尊格の念想の因として偉大であるので大印というのである。

この説明に対して、Padmavajra は以下の様に註釈している。

Tantrārthāvatāravākyāna: de la phyag rgya chen po'i mtshan nyid gsungs pa | de la lha'i gzugs brnyan ni phyag rgya chen po ste zhes pa ni | lha gang la dad pa dag gis skur sgom pa ni sku'i gzugs brnyan te | de ni phyag rgya chen po zhes bya'o || ci'i phyir zhe na | 'dra ba'i phyir lha de dran pa'i rgyur che bas na zhes pa ni | don dam pa nyid kyi phyag rgya chen po *ltar (D; n.e. P) lha'i cha lugs su snang ba de ltar bsgoms na de 'dra ba'i rtog pa 'jug pa'i phyir lha de dran par byed pa'i rgyur che bas na | phyag rgya chen po zhes bya'o || de la rgyu zhes pa ni phyag rgya chen po rdzogs pa'i lha'i gzugs de cha lugs ji lta ba bzhin du dran ba'i rgyu la bya'o || che ba ni des mtshon pa'i sgo nas de rtogs shing chud par gyur pa'o || (P ff.140v7-141r2, D f.129r1-3)

【和訳】それら〔四種類の印〕のうち、大印の特徴（あるいは定義）が説かれる。それに関して、「尊格の影像が大印である」とは、ある尊格に対して信をもって〔その〕影像を観想することが〔尊格の〕身体の影像であり、それが大印であると言われる。「なぜ」というのであれば、「類似しているから」であり、「その尊格の念想の因として偉大であるから」というのは、最高真実（勝義）であるところの大印と〔同じ〕あり方で、尊格の装いを

纏い顕現するものをそのように観想するならば、それ [=最高真実であるところの大印] と同じであるという理解に入るので、その尊格の念想する因として偉大であるから、大印というのである。それに関して、因とは完成した大印であるところのその尊格の姿の外見を適切に念想する因について [そのように言うのである。] 偉大であるとは、その [因] により特徴づけられたものを通して、それ [=最高真実] を証得して入ることである。

上に引用した *Tantrārthāvatāra*、および当該箇所に対する *Padmavajra* の註釈によるならば、大印が尊格の身体と関連付けられていることが分かる。また、*Buddhaguhya* が大印を尊格の念想 (おそらく原語は *anusmṛti*) の因であるとしているのは、実践において大印の観想 → 尊格の身体の観想という手順を踏むことにもとづいていると思われる (本論文中校訂テキスト §5.1.4.1, および和訳・註記を参照)。*Padmavajra* は明言はしていないが、大印には二種類あり、それは最高真実としての大印と、その最高真実へと至る (あるいは合一する) 手段としての尊格の影像も大印であると考えられる。

次に、誓戒印は以下の様に説明されている。

Tantrārthāvatāra: dam tshig gi phyag rgya'i don bshad par bya ste
| de la dam tshig gi phyag rgya mtshan ma sor mo bkod pa'i bdag
nyid ni dam tshig gi phyag rgya ste | bdag nyid chen po rnam kyī
thugs gsang ba ni dam tshig ces bya ba'i sgrar brjod de | rgyud nas
bshad pa ni yang dag par 'thob pa'am³ | rtogs par bya ba'i phyir
ram | mi 'da' ba'i don du dam tshig ces bya'o || gang gi phyir zhe
na | de rang gi yul *gyi (D; n.e. P) de kho na nyid *ni dam tshig gi
phyag rgya ste | bdag nyid chen po rnam kyis (D; las P) mi 'da'

³ yang dag par 'thob pa || Cf. *Pradīpoddhyotana* ad *Guhyasamāja* 15.3a: tāṃ samyag etīti samayam (p.162, ll.11–12).

ba'i ngo bo zhes sngar bshad pa yin no || de lta bas na lha'i thugs
gsang ba'i mtshan ma ni dam tshig ces bshad pa'i don te | de bas
na rgyud 'di nyid dang gzhan las kyang dam tshig gi phyag rgya
sgrub pa na bsgrub par bya ba'i dam tshig gi phyag rgya bcings
te snying ga'i phyogs su bzhag la rang gi snying gar sems rdo rjer
bsam mo zhes bshad do || (P ff.7r5–7v1, D f.6r1–4)

【和訳】誓戒印（三昧耶印）の意味が説かれる。それに関して、誓戒の印、すなわち [誓戒の] 特徴、すなわち指を組むことを自性としている [特徴] が誓戒印である。偉大なる諸存在（諸如来）の秘密の心が誓戒という言葉で説かれている。タントラの教説では、正しく理解すること、あるいは逸脱しないという意味で、誓戒 (samaya) と呼ばれている。なぜ [そのように言うのか] というのであれば、それ [=誓戒] 自体の対象であるところの真実が誓戒印であり、諸々の偉大なる存在による逸脱がない本性⁴であると先と同様に説かれるのである。それゆえ、尊格の秘密の心の特徴が誓戒として説かれるものの意味であり、その理由により、このタントラと他の [タントラ] にもとづいて誓戒印を成就しようとするときは、成就の対象であるところの誓戒の印を結び、心臓 [=胸] の位置に置き、自らの心臓を金剛 [杵] として観想すると説かれるのである。

Padmavajra の復註によれば、諸如来の秘密の心とは「徳目を円満した認識主体と認識対象を離れた心」であるという⁵。そしてそれこそが誓戒であり、その誓戒の対象、すなわち遵守すべき事柄である「真実」が誓戒印であると

⁴ P の読みに従うならば、「それ [=誓戒] 自体の対象であるところの真実から逸脱しない本性」となる。

⁵ *Tantrārthāvatārvyākhyāna*: thugs gsang ba zhes pa ni | yon tan phun sum tshogs pa dang ldan pa gzung 'dzhin dang bral ba'i ye shes so || (P f.142v5, D f.130v3–4)

いう。Buddhaguhya により明言されていないが、もし「如来の秘密の心」が真実のあり方であるとするならば、秘密の心とその対象ともに真実であることになる。このような「主体」と「対象」というような二項対立が解消された状態を「真実」とする考え方は、後期密教に受け継がれていくことになる。また、誓戒印が心を象徴しているので、心臓の位置で印を結ぶということは、密教の象徴主義を表していると言えるであろう。

次に法印であるが、これは「印」あるいは「印契」という言葉から一般的にイメージされる「手の組み方」ではなく、「言葉」によるものである。ブツダグフヤの説明を見てみよう。

Tantrārthāvatāra: chos kyi tshig gi rang bzhin gyi mtshan ma ni
chos kyi phyag rgya ste | ba dzra dznyā na dang | sa ma ya svam
| zhes *bya ba (D; *pa* P) la sogs pa'i mtshan nyid do || chos zhes
bya ba'i sgras ni 'dir gsung gi bdag nyid kyi lha ni bshad pa'i chos
nyid la bya'o || gang gi phyir de bdag nyid chen po rnam kyi gsung
thams cad ni don dam pa'i chos ston pa dang | gzhan la phan pa
ston pa'i ngo bo yin pas ni bshad pa'i chos kyi bdag nyid yin te
| de'i phyir phyag rgyar gyur pa ba dzra dznyā na zhes bya ba la
sogs pa chos kyi phyag rgya'i tshig rnam la ni chos kyi phyag
rgya zhes bshad do || (P ff.8r7-8v1, D ff.6v7-7r2)

【和訳】法(真理、教え、あるいはもの)の言葉としての自性の標識が法印であり、「金剛の智よ！(STTS H278(1) 五仏の法印)」や「汝は誓戒である(samayas tvam, STTS H278(2) 金剛薩埵の法印)」などのあり方をしている。「法」という単語は、この場合、語の自性としての尊格であり、他ならぬ教説法について言われるのである。偉大なる諸存在のあらゆる言葉は最高真実の法の説示と利他の説示の本性であり、教説法を自性とするので、印となった「金剛の智よ！」を始めとした法印の言葉に対して

法印であると説かれるのである。

この場合、注意しなければならないのは、法印は単なる言葉ではなく、尊格の言葉としての側面であるということである。これはマントラの場合と同様である。

最後にカツマ印について見てみたい。カツマ印は *karmamudrā* という原語の通り、尊格の行為を象徴するものである。*Buddhaguhya* の説明は以下の通りである。

Tantrārthāvatāra: las kyi phyag rgya'i sgra'i don yang bshad par bya ste | de la lha'i las kyi mtshan ma ni las kyi phyag rgya ste | byang chub *mchog (D; n.e. P) la sogs pa'i phyag rgya'i mtshan nyid do || de bzhin du de sgrub pa'i tshe las sna tshogs pa'i rang bzhin rdo rje rtse mo thams cad pa las thams cad sgrub pa lus kyi snying ga'i phyogs su de sgrub pa pos bsam par bshad de | 'dir yang las nye bar bstan pa'i sgo nas yan lag dang bcas pa'i lha'i ngo bo nyid nye bar ston par don gyis shes par bya ste | las dang byed pa po tha mi dad pa'i phyir ro || (P ff.8v7–9r1, D f.7r6–7)

【和訳】カツマ印の語の意味が説かれる。それに関して、尊格の行為の標識がカツマ印であり、最上菩提 (*bodhyagrī*) などの印のあり方をとる。同様に、それを成就する時に、さまざまな行為を自性とする、すべての行為を成就するものである二重金剛杵 (*rdo rje rtse mo thams cad pa*, *viśvavajra*, カツマ金剛杵のこと) を、実践者は身体の心臓の場所に観想すると説かれている。また、この場合、説示された行為を通して、身体の部分を備えた尊格の本質が説示されると、意味の上から理解されるべきである。なぜならば、[尊格の] 行為対象 (*las*, *karman*) と行為主体 (*byed pa po*, *kartr*)[である尊格に] 区別がないからである。

カツマは「行為」を意味するのと同時に、カツマ金剛杵のことを意味する。これは五鉤金剛杵が十字に重なっているものであり、上の引用にある通り、二重金剛杵(サンスクリット語で *viśvavajra*、文字通りには「すべての方向に先端を向けた金剛杵」を意味する)のことである。そしてこのカツマ金剛杵がすべての成就した行為を象徴するのである。また、行為主体と行為対象の区別がないというのは、先述した「二項対立の解消した状態」に相当するものである。

このように、四印は尊格の身体・言葉・心・行為に対応するものであるが、ここで注意しなければならないのは、印が単にこれらの側面を象徴するものであるだけでなく、実践者がそれを用いることによって一体となるものである。例えば、大印の場合は、大印を通して尊格の身体を念想し、それと一体となることが説かれている(本論文中校訂テキスト §5.1.4.1, およびその和訳註を参照)。また、誓戒印を結び「*samayas tvam aham*」というマントラを唱えることは、実践者がその誓戒と一体となることを如実に示していると言えよう(本論文中校訂テキスト §5.1.4.2, およびその和訳註を参照)⁶。更に付け加えると、本論文で検討する大印の場合、*sādhana* が *mudrā* と合一する手段、*siddhi* が合一すること、*karman* が合一することにより得られる効果(果報)であると言えよう。

1.3 アーヴェーシャと四印

四印に関する教理的側面を *Buddhaguhya* の註釈を通して見てきたが、それでは四印は STTS の実践体系ではどのように機能しているのであろうか？管見の限り、これまでの研究ではあまり指摘されてこなかったことであるが、この四印の実践はアーヴェーシャと深く関係している。これは、STTS の第 1 章にもとづく実践マニュアルである、*Ānandagarbha* 著 *Sarvavajrodayā* を

⁶ シヴァ教において *mudrā* がアーヴェーシャの手段であり、また実践者にアーヴェーシャするものであることについては、SMITH 2006: 376ff. を参照。

参照するとより一層浮かび上がってくる事柄である。今回本論文で検討する「四印に関する智」のセクションは、全体としては「成就法」、すなわち実践者が観想上で尊格と合一する手順を示すマニュアルとなっている。STTSの本文を、Ānandagarbhaの註釈書である *Tattvāloka-karī* を参照しながら、*Sarvavajrodayā* と比較すると、本論文における 5.1.4 以降が *Sarvavajrodayā* の Ādiyoga の規定に対応することが見えてくる。

以下、*Sarvavajrodayā* の Ādiyoga のシノプシスを示し、STTS 本文との対応関係を示してみたい⁷。

1. 内的沐浴（一切法無自性の観想）(D f.1r4–5) (T2)
2. 実践者・実践場所・ヨーガの守護 (D ff.1r5–3r6) (T3–T18)
3. 四礼 (D ff.3r6–3v2) (T19)
4. 懺悔 (D f.3v2–7) (T20)
5. 印による供養 (D ff.4r1–6v2) (T21–T22)
[5.1. 花, 5.2. 焼香, 5.3. 灯明, 5.4. 塗香, 5.5. 器, 5.6. 笑い, 5.7. 衣, 5.8. 三昧, 5.9. 金剛薩埵, 5.10. 妖艶な踊り, 5.11. 華鬘, 5.12. 歌, 5.13. 舞, 5.14. 花, 5.15. 焼香, 5.16. 身体による礼拝, 5.17. 讃, 5.18. 心による供養, 5.19. 秘密の供養, 5.20. 自身の供養]
6. 廻向 (D f.6v2–4) (T22)
7. 律儀の保持 (D ff.6v4–7r2) (T23)
8. 尊格との合一（アーヴェーシャ）(D f.7r2–5) (T24) = STTS H299–H300
9. 罪の浄化・破壊、悪趣の除去 (D ff.7r5–7v2) (T25–T27)
10. 自加持 (D ff.7v2–9r3) (T28–T38) = STTS 5.1.4. v.2 (H253 v.3)

⁷ 周知の通り、*Sarvavajrodayā* のサンスクリット語テキストは、ネパールに現存する写本 1 本により伝承されており、その現存唯一の写本も完本ではなく、Ādiyoga はその章の奥書の一部を除いて、チベット語訳のみが参照可能である。以下に示すシノプシスでは、デルゲ版のロケーションおよび高橋尚夫氏の和訳のセクション (T で始まる番号) を付しておく。また、対応する STTS については、堀内校訂本のセクション番号を付しておく (H で始まる番号)。

[10.1. 印の自我の観想, 10.2. 誓戒の存在の観想⁸, 10.3. 入マンドラ, 10.4. マンドラの拝見, 10.5. 水灌頂, 10.6. 宝冠・ターバンの灌頂, 10.7. 甲冑を纏う, 10.8. 金剛杵灌頂, 10.9. 金剛名灌頂, 10.10. 金剛誓戒]

11. マンドラの尊格との予備的合一

- 11.1. 存在の観想 (D ff.9r3–13r5) (T39–T54)
 - 11.1.1. 金剛薩埵 (D f.9r3–7) (T39) = STTS 5.1.4.1 および 5.1.4.2.v.1 (H254–H256v.1)
 - 11.1.2. 金剛王～金剛憑依 (D ff.9r7–10v4) (T40–T47) = STTS 5.1.4.2 v.2 (H256v.2)
 - 11.1.3. 身体マンドラの完成 (D f.10v4) (T48) = STTS 5.1.4.2 v.3 (H256v.3)
- 11.2. 四印による印づけ (D ff.10vr–13r5) (T49–T54)
 - 11.2.1. 誓戒印 (D ff.11r3–11v6) (T51) = STTS H263–H270
 - 11.2.2. 法印 (D ff.11v6–12r1) (T52) = STTS H278–H283
 - 11.2.3. カツマ印 (D ff.12r1–12v1) (T53) = STTS H285–H290
 - 11.2.4. 大印 (D ff.12v1–13r5) (T54)
- 11.3. 心臓に金剛薩埵を観想する (D ff.13r5–14r1) (T55–T58)
- 11.4. 三三昧耶の供養 (D f.14r1–4) (T59)
- 11.5. 空性の観想 (D f.14r4–5) (T60)
- 11.6. 楼阁宮殿の観想 (D ff.14r5–14v2) (T61)
- 11.7. 一切義成就菩薩の観想 (D f.14v2–5) (T62)
- 11.8. 四無量心の観想 (D ff.14v5–15r2) (T63)
- 11.9. 五相現等覺 (D ff.15r2–16v6)= STTS H19–H28

⁸ 10.1–2 (=T28–29) で説かれている実践は、STTS v.5.1.2 に対する註釈の形で Ānandagarbha が示している手順と等しい。また、当該セクションにおいて使用されるマントラは STTS H301–H303 に見出すことができる。

上に示した *Sarvavajrodayā* の規定する実践の次第を見てみると、「11. マンドラの尊格との予備的合一」が、本論文で提示する大印の実践、そしてそれに引き続く四印による印づけに相当する箇所である。この実践の前に「自加持（尊格である実践者自身が自身に灌頂を授けること）」があるが、この前提としてアーヴェーシャが行われていることは重要である。つまり、実践者がアーヴェーシャを通して尊格と合一し、実践者自身に灌頂を授けることになるのである。また、「11.1. 存在の観想」においても、金剛の本性のアーヴェーシャが行われることになる。これらの具体的なプロセスについては、引き続き和訳および註記において詳しく見ていくことにしたい⁹。

1.4 本論文で提示する校訂テキストおよび訳註について

以上、「四印に関する智」に関して、STTS と *Sarvavajrodayā* の対応関係を示し、アーヴェーシャを視点としてその概要を少しく検討した。以下に提示する、STTS の校訂テキストはこの対応関係と *Tattvālokaṅkāra* の註釈をもとにセクション分けしている。したがって、*Ānandagarbha* にもとづく内容理解によっている。*Ānandagarbha* による論書以外にも、STTS に関連した註釈文献はいくつかあり、STTS の内容・実践に関しては複数の異なる理解があったことが想定されるが、STTS 所説の実践を理解するための最初のステップとして、著作のサンスクリット語原典も現存し、多くの著作がチベット語大蔵経に現存する *Ānandagarbha* を中心に据えることにしたい。

以下、STTS のサンスクリット語校訂テキストおよび訳註を提示することで、大印の実践のプロセスの詳細を考察していくことにしたい。

⁹ 印とアーヴェーシャが深く関係していることは、STTS およびその註釈文献以外でも確認できる。『百五十頌般若』では、4 種類の印を説くが（苦米地校訂本セクション 18–20）、そこでの心髓（心呪）は *ah* である。これは STTS におけるアーヴェーシャのマントラである。宮坂 2022 を参照のこと。

1.5 写本情報および註記・略号について

本論文における STTS サンスクリット語校訂テキストに使用する写本資料、またこれまでの版本については、種村 2020 の「3 *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* の写本および版本について」を参照されたい。テキストおよび訳註については、種村 2020 同様に STTS Kaisar Library 所蔵写本、STTS チベット語訳、その他関連文献に基づいている。

本論文におけるテキストの critical apparatus およびそこで使用される記号は、種村 2020 と同様、以下に述べる通りである。

テキストの脚註が 4 層に分かれており、それぞれの層において註記される事項と、その仕方は以下の通りである。(必ずしも各ページに 4 層すべてが現れるわけではない。)第 1 層には STTS が引用される文献およびパラレルが見られる文献が註記される。第 2 層には、第 3 層の異読欄に記すことが困難な写本や版本に関する註記やチベット語訳に関する註などが記される。第 3 層には写本の異読情報を記す。第 4 層には各写本のフォリオ番号を註記する。āpnu[91r]yāt とある場合は、āpnu-と-yāt の間にフォリオの切れ目があり、f.91r が-yāt から始まることを示している。註記される箇所がある行番号の後に見出し語があり、見出し語に異読などの註記が引き続くことになる。第 3 層において、見出し語の直後に出てくる記号は、本文中で採用された読みを指示する写本の記号であり、その後セミコロンで区切り異読を提示する。また、emendation および conjecture を支持する文献があるときは、← の記号で示す。(例: *pravartayet* ¶ em. (← STTS H292, H295); *sa vartayet* Ms E^H E^Y)

上記写本略号以外の、本論文で使用される略号は以下の通りである。

D sDe dge edition

em. an emendation

em. (sil.) a silent emendation in E^H and E^Y

- H section number in HORIUCHI's edition of the STTS
- n.e. not existent
- Ota. D. SUZUKI (ed.) *The Tibetan Tripitaka, Peking Edition: Kept in the Library of the Otani University, Kyoto: Reprinted under the Supervision of the Otani University of Kyoto: Catalogue & Index*, Tokyo: Suzuki Research Institute, 1962. 『影印北京版西藏大藏経—大谷大学図書館蔵—大谷大学監修西藏大藏経研究会編輯総目録附索引』東京・鈴木学術財団, 1962.
- P Peking edition
- Taisho 大正新脩大藏経
- Tib. Tibetan Translation
- Toh. H. UI, M. SUZUKI, Y. KANAKURA and T. TADA (eds.) *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons*, Sendai: Tohoku Imperial University, 1934. 『西藏大藏経総目録東北大学所蔵版』仙台・東北帝国大学, 1934.
- akṣaras damaged, but legible *akṣaras*

訳註に関しては、STTS 本文の和訳をセクションごとに提示し、セクションごとに和訳のあとに、当該セクションの内容に関する全体的な註記を続けて提示する。また、個別の註記事項は脚註に示すこととする。Tattvālokakārī 等のチベット語のみ現存する註釈について、サンスクリット語註釈文献に見られる同義語での言い換えに関して、翻訳が困難な場合がある。その場合には「それらを備えている (de rnam yang dag par ldan / de dang bcas par)」のように、原文では同義語での説明があることを表示することとしたい。

2 TEXT

5. Caturmudrājñānam

[H250] tato hr̥dayaṃ dattvā svakuladevatācaturmudrājñānaṃ śīkṣayet. anena vidhinā vaktavyam.

na kasyacit tvayānyasyaiśāṃ mudrāṇāṃ akovidasya ekatarāpi mu-
5 drā darśayitavyā. tat kasya hetoḥ. tathā hi te sattvā adṛṣṭamahā-
maṇḍalāḥ santo mudrābandhaṃ prayokṣayanti tadā teṣāṃ na
tathā siddhir bhaviṣyati. tatas te vicikitsāprāptā viśamāpari-
hāreṇa śīghraṃ eva kālaṃ kṛtvāvīcau mahānarake pateyuḥ. tava
cāpāyagamaṃ syād iti.

10 5.1. Mahāmudrā

5.1.1. Sarvatathāgatasattvasādhana mahāmudrā

[H251] atha sarvatathāgatasattvasādhana mahāmudrājñānaṃ bhavati.

cittajñānāt samārabhya vajrasūryaṃ tu sādhayet |

buddhabimbaṃ svam ātmānaṃ vajradhātum pravartayan || 1 ||

15 anayā siddhamātras tu jñānaṃ āyur balaṃ vayaḥ |

prāpnoti sarvagāmitvaṃ buddhatvaṃ api na durlabhaṃ iti || 2 ||

sarvatathāgatābhisambodhimudrā.

14 buddhabimbaṃ svam ātmānaṃ || STTS H473, H481, H1108, H1566

13 vajrasūryaṃ tu sādhayet || 次應觀想金剛月 Ch2 (corruption of 次應觀想金剛日?)

14 buddhabimbaṃ svam ātmānaṃ || 自身即是諸佛形 Ch2

6 prayokṣayanti || Ms E^H; *prayojyanti* em. E^Y (sil.) 7–8 viśamāparihāreṇa || em. E^H E^Y (sil.);
viśamāparihāreṇa Ms 8 kṛtvāvīcau || Ms E^H; *kṛtvāvīcī*° em. E^Y (sil.) 8 pateyuḥ || Ms E^H;
patantaḥ em. E^Y (sil.) 14 buddhabimbaṃ svam ātmānaṃ || Ms E^Y; *buddhabimbaṃ tu mātmanāṃ*
E^H 15 vayaḥ || Ms E^H; *varṣaḥ* em. E^Y (sil.)

14 vajra[90v1]dhātum pravartayan

5.1.2. Vajrasattvasādhana mahāmudrā

[H252] atha vajrasattvasādhana mahāmudrābandho bhavati.

- 20 sagarvaṃ vajraṃ ullāya vajragarvāṃ samudvahan |
 kāyavākcittavajrais tu vajrasattvaḥ svayaṃ bhavet || 1 ||
 anayā sarvagāmī tu sarvakāmapatiḥ sukhī |
 ṛddhyāyurbalarūpāgryō vajrasattvasamo bhaved iti || 2 ||

5.1.3. Vajrarājādisādhana mahāmudrā

- 25 [H253] kāyavākcittavajrais tu yathālekhyānusārataḥ |
 cihnamudrāsamopetān mahāsattvāṃs tu sādhayet || 1 ||

5.1.4. Mahāmudrānāṃ sādhanāṃ siddhiḥ karma ca

- athātra sarvakalpānāṃ sādhanāṃ siddhir eva ca |
 siddhānāṃ ca mahat karma pravakṣyāmy anupūrvaśaḥ || 1 ||
30 pratyahaṃ prāg yathākālaṃ svādhiṣṭhānādikaṃ tathā |
 kṛtvā tu sādhayet sarvaṃ tataḥ paścād yathāsukham iti || 2 ||

5.1.4.1. Mahāmudrāsādhana vidhiḥ

[H254] tatrāyaṃ mahāmudrāsādhana vidhivastaro bhavati.

- vajrāveśaṃ samutpādyā mahāmudrāṃ yathāvidhi |
35 baddhvā tu puratas taṃ tu mahāsattvaṃ prabhāvayet || 1 ||
 taṃ dṛṣṭvā jñānasattvaṃ tu svaśarīre prabhāvayet |
 ākṛṣya praveśya baddhvā vaśīkṛtvā ca sādhayet || 2 ||

20–21 sagarvaṃ ... bhavet || Cf. *Vajrasekhara*: *sems pa'i skyil mo *krung* (D; *dkrung* P) 'dug ste || rdo rje gsor la gzung bar bya || sku dang gsung thugs phyag rgya dag || rdo rje sems dpa' rang nyid 'gyur || ... bsn'yems bcas rdo rje gsor nas ni || rdo rje bsn'yems tshul yang dag gzung || rdo rje dbab par rang gyur nas || bdag nyid rdo rje zhes byar bsgom || (P ff.240v8–241r2, D ff.214r6–214v1))

29 mahat karma || E^Y understands this as a compound (*mahatkarma*).

26 cihnamudrāsamopetān || E^H; *cihnamudrāsamopetān* Ms; *cihnamudrān samopetān* E^Y

[H255] tatraiṣāṃ hṛdayāni bhavanti. vajrasattva aḥ. vajrāveśahṛdayam. vajrasattva
dṛśya. mahāsattvānusmṛtiḥṛdayam. jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ. mahāsattvākaraṇaprave-
śanabandhanavaśīkaraṇahṛdayam.

5.1.4.2. Mahāmudrāsiddhiḥ

[H256] samayas tvam iti prokte pṛṣṭhataś candram āviśet |
tatrātmā bhāvayet sattvaṃ samayas tvam ahaṃ bruvan || 1 ||
yasya sattvasya yā mudrā tām ātmānaṃ tu bhāvayet |
sādhayed vajrajāpena sarvamudrāprasādhanaṃ || 2 ||
jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ bruvan kāye sarvabuddhān praveśayet |
manasā sādhuযোগেন সাদহানং ত্ব অপারম মাহাদ ইতি || 3 ||

5.1.4.3. Mahāmudrākarma

[H256-2] athāsāṃ karma pravakṣyāmi vajrakarma niruttaram |

[Five Tathāgatas]

buddhānusmṛtisamsiddhaḥ śīghraṃ buddhatvam āpnuyāt || 1 ||

[Four Deities Surrounding Vairocana]

[H257] sattvavajryā tu samsiddhaḥ sarvamudrādhipo bhavet |

ratnavajryāṃ tu mudrāyāṃ sarvaratnādhipaḥ sa tu || 2 ||

siddhas tu dharmavajryā vai buddhadharmadharo bhavet |

karmavajriṇi mudrāyāṃ vajrakarmakaro bhavet || 3 ||

[Vajrakula]

[H258] siddhyate vajrasattvas tu baddhayā sattvamudrayā |

ākaraṣayed vajradharāṃ vajrākaraṣaprayogataḥ || 4 ||

47 sādhuযোগেন || E^Y understands this as separate words, i.e. *sādhu योगেন*.

56 karmavajriṇi || For *karmavajryāṃ* or *karmavajriṇī-* (metrical reason). In the latter case, the reading should be *karmavajriṇimudrāyāṃ*.

38 aḥ || Ms E^Y; āḥ E^H 43 bruvan || Ms E^H; *brūvan* E^Y 51 āpnuyāt || Ms E^H; *āptayāt* E^Y

59 vajradharāṃ || Ms E^Y; *vajradharān* em. E^H

51 āpnu[91r]yāt

- 60 vajrarāgamahāmudrā sarvabuddhāṃs tu rāgayet |
toṣayet sarvabuddhānāṃ vajrasādhuprayogataḥ || 5 ||

[Ratnakula]

- dadyād buddhābhiṣekāṇi ratnamudrāvidhis tathā |
vajratejā bhavec chīghraṃ vajratejaprayogataḥ || 6 ||
65 vajraketudharaṃ sevyā bhaved āśāprapūrakaḥ |
vajrahāśavidhiṃ yojya sarvabuddhaiḥ samaṃ haset || 7 ||

[Padmakula]

- [H259] vajradharmadharo bhūyād vajradharmaprayogataḥ |
prajñāgryaḥ sarvabuddhānāṃ vajratīkṣṇaprayogataḥ || 8 ||
70 vajracakradharaṃ sevyā dharmacakraṃ pravartayet |
buddhavāksiddhim āpnoti vajrabhāṣaprayogataḥ || 9 ||

[Karmakula]

- vajrakarmā bhavet kṣipraṃ vajrakarmāgryasāadhanāt |
nibadhya vajrakavacaṃ vajrakāyatvam āpnuyāt || 10 ||
75 vajrayakṣaṃ tu vai sādhyā vajrayakṣasamo bhavet |
sarvamudrāprasiddhas tu vajramuṣṭinibandhanāt || 11 ||

[Eight Goddesses of Worship]

- [H260] vajralāsyāṃ tu vai sādhyā mahāvajraratiṃ labhet |
vajramālānibaddhas tu sarvabuddhābhiṣekadaḥ || 12 ||
80 yojayed vajragītāṃ tu vajragītāprayogataḥ |
vajranṛtyāṃ tu saṃyojya sarvabuddhaiḥ sa pūjyate || 13 ||

70 pravartayet || E^Y says “Ch and T suggest *pravartayet* instead of *sa vartayet*.” Tib.: *rdo rje 'khor lo 'dzin bsten pas* || *chos kyi 'khor lo bskor bar 'gyur* || (P f.33v7, D 31r1–2); Ch.1: 持習金剛輪則能轉法輪 (220c1) Ch.2: 持習金剛輪因故 即能轉彼大法輪 (356a29)

74 nibadhya vajrakavacaṃ || *na-vipulā*

70 pravartayet || em. (← STTS H292, H295); *sa vartayet* Ms E^H E^Y 73 vajrakarmā || em.; *vajrakarma* Ms E^H E^Y 73 bhavet kṣipraṃ || Ms; *bhavec chīghraṃ* E^H; [*gatam*] *kṣipraṃ* E^Y 79 vajramālānibaddhas || Ms; *vajramālāṃ nibaddhas* E^H; *vajramālāṃ nibandhas* E^Y 81 vajranṛtyāṃ || Ms E^Y; *vajranṛtyaṃ* E^H

[H261] prahlādayej jagat sarvaṃ vajradhūpāprayogataḥ |

vajrapuṣpāṃ tu saṃyojya vaśīkuryāj jagat sa tu || 14 ||

vajrāloka mahāmudryā cakṣur dadyāt prapūjayan |

85 sarvaduḥkhaharo bhūyād vajragandhaprayogataḥ || 15 ||

[Four Gate-keepers]

[H262] vajrāṅkuśasamākarṣāt sarvākarṣakaraḥ paraḥ |

sarvapraveśako bhūyād vajrapāśaprayogataḥ || 16 ||

vajrasphoṭaṃ tu saṃyojya sarvabandhakṣamo bhavet |

90 vajrāveśavidhiṃ yojya sarvāveśaprasādhaka iti || 17 ||

84 vajrāloka mahāmudryā || em. (← STTS Tib., Ch1, Ch2); *vajrāloka mahāmudrā* Ms E^H E^Y

3 和訳および註記

5. 四印に関する智

和訳

次に心髓を与えてから、すべての部族の尊格の四印に関する智を学ばせるべきである。[阿闍梨は]次のやり方で[文言を]唱えるべきである。

汝は、これらの印のうち、どれか一つでも他の無知なる者に絶対に示してはならない。それはなぜであろうか？説明するならば、もし大マンドラを見たことがない者たちが、印の結びを用いたならば（印を結んだならば）、彼らには所定の (tathā) 成就がないであろう。したがって、彼らは、[四印の効果に対する]疑念¹⁰を抱くため、危険を避けられず¹¹に、即座に死に、アヴィーチという大地獄に堕ちるであろう。汝もまた悪趣に墜ちるであろう。

¹⁰ Ānandagarbha によれば、未入マンドラの者が四印を使用しても効果がなく、それゆえ四印が如来の教説でないのではと疑うことである。 *Tattvāloka-kārī*: de nas de dag the tshom du 'gyur ro (tatas te vicikitsāprāptāḥ) zhes bya ba ni de nas phyag rgya bcing ba la sbyor ba de rnams 'bras bu thob par ma gyur pas the tshom du gyur te | ji 'di de bzhin gshegs pas gsungs pa ma yin nam snyam du yid gnyis kyis sems su 'gyur ro || (P f.163r7–8, D f.144r5)

¹¹ Ānandagarbha によれば、「危険」とは世尊の教説に違反することであり、大マンドラ未見の者が、四印のうち、たとえ一つの印でも使用することが「危険を回避しない」ことである。また、如来の教説に関して疑いをもつことも「危険」であるとしている。この場合の「如来の教説」とは金剛界大マンドラの教義、より特定的には四印の教義であろう。 *Tattvāloka-kārī*: gnod pa ma spangs pa zhes bya ba la gnod pa ni bcom ldan 'das kyi bka' las 'das pa'o || bka' de yang 'di yin te | dkyil 'khor chen po ma mthong bas phyag rgya gang yang rung ba cig tsam yang bcing bar mi bya zhing rab tu sbyar bar mi bya'o zhes bya ba 'di ma spangs pa ni gnod pa ma spangs pa'o || yang na de bzhin gshegs pa'i gsung la som nyir gyur pa ni gnod pa ste | de ma spangs pa ni gnod pa ma spangs pa'o || (P f.163v2, D f.144r5–7)

註記

Ānandagarbha の註釈によるならば、この四印に関するセクションは、直前のセクション「成就が生じるための印に関する智」(種村 2020 で校訂テキストおよび訳註を提示したセクション)と連続したものである。「成就が生じるための印に関する智」において、灌頂を授かった弟子が自らの望む成就、すなわち 1. 財宝の成就、2. 金剛神通の成就、3. 金剛持明者の成就、4. すべての如来の最上の成就のうちいずれかを述べ、それに応じた実践が授けられるべきことが説かれている。

「四印に関する智」の冒頭で述べられている「心髄」とは、そのそれぞれの実践に使用する心髄(心マントラ)と投華によって得た本尊 (iṣṭadevatā/svādhidevatā) の心髄の 2 つである¹²。

この授けるべき心髄に関しては、いくつかのオプションが説かれている。実践者の望む成就が、財宝の成就等の現世利益的なものではなく、金剛薩埵の位 (vajrasattvatva) などの場合は、「金剛薩埵よ！」などの、尊格に応じた心髄が与えられるべきであるとしている¹³。あるいは、金剛薩埵の大印、あるいは誓戒印やカツマ印の成就を望む場合には、実践者自身の尊格の心髄のみが授けられる¹⁴。また、法印の成就を望む者には、法印のみが授けられる (すなわちこの場合には他の心髄は与えられない) と説かれている¹⁵。

Ānandagarbha の註釈によれば、四印は個別で成就の対象となることも想定されていたことが分かる。

¹² *Tattvālokakārī*: don gyi dngos grub la sogs pa bsgrub pa'i phyir | de'i snying po dang | sgrub pa po'i me tog lha'i sku gang la bab pa de'i snying po sbyin no || (P f.162v2-3, D f.143v1-2)

¹³ *Tattvālokakārī*: gang yang rdo rje sems dpa' la sogs pa nyid 'dod kyi | *don gyi (D; *de ni* P) dngos grub la sogs pa ma yin pa de la ni ba dzra sa twa zhes bya ba la sogs pa'i snying po sbyin par bya'o || (P f.162v3-4, D f.143v2-3)

¹⁴ *Tattvālokakārī*: yang gang zhig dpal rdo rje sems dpa' la sogs pa'i phyag rgya chen po'am | dam tshig dang las kyi phyag rgya bsgrub par 'dod pa de la ba dzra sa twa zhes bya ba la sogs pa rang gi lha'i snying po nyid sbyin no || (P f.162v4-5, D f.143v3-4)

¹⁵ *Tattvālokakārī*: gang zhig chos kyi phyag rgya bsgrub par 'dod pa de la chos kyi phyag rgya 'ba' zhig sbyin par bya'o || (P f.162v5, D f.143v4)

5.1. 大印

5.1.1. すべての如来である存在を成就する手段としての大印

和訳

[H251] 次に、すべての如来である存在¹⁶を成就する手段としての大印¹⁷の智がある。

心 [に] 智 [を憑依させること] [／心を知ること] から始めて、
「金剛界よ！」と唱えながら (vajradhātum pravartayan)¹⁸、自分自身を金剛日であるところの仏の影像として成就するべきである¹⁹。

¹⁶ Ānandagarbha は sarvatathāgatasattva という複合語を karmadhāraya で解釈している。具体的には五如来と金剛薩埵から金剛憑依に至るまでの諸尊格である。Tattvālokarī ad STTS Vajradhātumahāmaṇḍala 5.1.1. opening prose: de bzhin gshegs pa thams cad kyang yin la sems dpa' yang yin pas na de bzhin gshegs pa thams cad kyi sems dpa' ste | de bzhin gshegs pa rnam dang | rdo rje sems dpa' la sogs pa nas | rdo rje 'bebs pa'i bar gyi sems dpa' rnam so || (P f.163v5-6, D f.143v2-3)

¹⁷ Ānandagarbha は、大印とは sarvatathāgatasattva の身体の印であり、sarvatathāgatasattva を成就する手段としている。Tattvālokarī ad STTS Vajradhātumahāmaṇḍala 5.1.1. opening prose: de rnam kyi bsgrub pa ni phyag rgya chen po yin te | de rnam kyi sku'i phyag rgya la de bzhin gshegs pa thams cad kyi sems dpa' bsgrub pa'i phyag rgya chen po'o zhes bya'o || (P f.163v6-7, D f.144v3-4)

¹⁸ Ānandagarbha はこのマントラが五如来に共通した心髄であると述べている。Tattvālokarī ad STTS Vajradhātumahāmaṇḍala 5.1.1. v.1: ci zhig zlos shing bsgom par bya zhe na | rdo rje dbyings zhes rjod byed cing (vajradhātum pravartayan) (1d) || zhes bya ba gsungs te | de bzhin gshegs pa lnga'i spyi'i snying po ba dzra *dhā (D; dha P) tu zhes bya ba rjod par byed cing yongs su zlos bzhin du'o || (P f.164r8, D f.145r4-5)

¹⁹ 堀内校訂本は svam ātmānaṃ を tu mātmanam と読み、以下の様に註記している。「mātmanam は (Acc. sg.): ātmānaṃ がそのままでは tu と連声して tvāt° となり、結局五字目が長韻となるので、tu をそのままにするため mātmana としたものか。〔追記〕先のローマ字本では、以上の如く注記した事に対し、清田氏から「mātmanam 〔は註〕*2) の説に賛成、但し斯かる'm'の挿入は、仏教梵語として珍しからず。」と御教示を受けた。」(E^H pp.145-146) しかしながら、写本は実際には svam ātmānaṃ と読んでいる。堀内本における上記の誤解は、(1) 写本当該箇所が少々汚損しており、文字が読みにくくなっている。(2) 堀内氏が stu と読んでいる文字は実際には sva であるが、当該写本では mva と sva が区別しにくく、かつ文字の下端部で墨がリーフの繊維に沿って右側に流れている、ある

この [印] によって成就があるやいなや、智、寿命、力、若さ (vayas)、遍在性を獲得する。また仏位も得がたくはない。

註記

「四印に関する智」のセクションに先行する「成就が生じるための印に関する智」のセクションでは、4 番目の成就として「すべての如来の最上の成就」を説くが、そこでの成就として「持金剛となること」と「仏位を得ること＝仏になること」が言及され、そのための手段が説かれている。当該セクションにおいて超自然的な力の獲得といった現世利益的なゴール (享受, *bhukti*) が言及されているなかで、この 2 つが解脱 (*mukti*) に関わる事柄である。「持金剛となること」が「金剛薩埵となること」と同等であると考えられるならば、この四印のセクションにおける「すべての如来である存在を成就する手段としての大印」と「金剛薩埵を成就する手段としての大印」は、前セクションにおける *mukti* に関わる 2 つのゴールに対応している可能性がある。ただし、この点は註釈書の記述から判断することは難しい。

mukti における実践のゴールとして「仏＝如来」「持金剛」の二種類を想定することは、『百五十頌般若』にも見られる事柄である²⁰。そしてこのことは、

いはリーフの繊維があたかも文字の一部のように見られる、ということに起因していると考えられる。

STTS における用例を見るならば、*buddhabimbaṃ svam ātmānaṃ* という表現は、堀内本の H473, H481, H1108, H1566 で見られる。また他に *-bimbaṃ svam ātmānaṃ* という表現も見られる (H470: *candrabimbaṃ svam ātmānaṃ*, H471: *vajrabimbaṃ svam ātmānaṃ*, H606: *vajrasattvaṃ svam ātmānaṃ*, H2269: *vajrabimbaṃ svam ātmānaṃ*, H2271: *padmabimbaṃ svam ātmānaṃ*)。

当該部分の漢訳は以下の通りである。観自爲佛形 (Ch1, 220a16)、自身即是諸佛形 (Ch2, 355c9)。施護訳 (Ch2) は、元になった STTS のサンスクリット語写本の読みが、*buddhabimbambān svam ātmānaṃ*、あるいは *buddhabimbāṃs svam ātmānaṃ* であった可能性がある (後者の方がより可能性が高いか)。

²⁰ *Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā*: *ṣoḍaśame mahābodhisattvajānmani tathāgatatvaṃ pratilapsyate vajradharatvaṃ ceti* (E^T §5); *sarvāvaraṇapariniṣṭhatayā tathāgatatvaṃ vajradharatvaṃ vāśu bhaviṣyati* (E^T §34)。

密教の実践における *mukti* のゴールが一つであるのか（この場合、このゴールは伝統的大乗仏教のゴールと同一であるとされる）、あるいは密教独自のより超越的なゴールがあるのか、という議論にもつながるものである。本論文では筆者の能力と紙幅の2点から、この問題を論じることはできないが、少なくともそのような問題を孕む可能性があることを指摘しておきたい。

STTS 本文では *cittajñānāt samārabhya* という二語で表されている箇所、実際の瞑想のプロセスは、*Ānandagarbha* によれば以下の通りである。

1. 金剛合掌と金剛縛を結び、胸で金剛縛を解き、金剛憑依を生起させる。（イントロダクションで提示した *Sarvavajrodayā Ādiyoga* のシノプシスの「8. 尊格との合一」に相当。STTS の典拠は H299–H300²¹。）
2. 金剛結跏趺坐で座し、金剛縛を上に向けて、[その金剛縛を] 結跏趺坐の上において、自らの心臓にある五钴金剛杵を観想する。
3. [四] 静慮と無色定に入入ることを現前し、自らを一切義成就大菩薩の身体を取り、色究竟天の菩提道場に座していると観想する。（*Sarvavajrodayā Ādiyoga* 11.7 「一切義成就菩薩の観想」に相当）この場合、一切義成就菩薩は意生身 (*manomayakāya*) であり、一生補処であり、宝冠とターバンによる灌頂を受けている。
4. 毘盧遮那・阿閼等の五如来の印を結び、五相現等覚を行う。（*Sarvavajrodayā* 「11.9. 五相現等覚」に相当。STTS の典拠は H19–

²¹ STTS H299–H300: *atha sarvamudrāṇām sāmānyo bandhavidhivistaro bhavati. tatrādita eva vajrabandhāṅgulispṛṣṭānam kṛtvā hṛdaya, idaṃ hṛdayam uccārayet. vajrabandha traṭ. tataḥ sarvamudrābandhāḥ svakāyavākcittavajreṣu vaśībhavanti. tato vajrāveśasamayamudrāṃ baddhvedaṃ hṛdayam uccārayet. aḥ. tataḥ samāviṣṭā mitratvenopatiṣṭhanti.* 【和訳】「次に、すべての印に共通した結びの詳細な儀軌がある。それに関して、必ず最初に (*ādita eva*)、胸の位置で金剛縛の指を解き、以下の心髄を唱えるべきである。「金剛縛よ！トゥラットゥ」。そうすれば、すべての印の結びが、自らの金剛のごとき身体・言葉・心において、制御される。そして、金剛憑依の誓戒印を結び、以下の心髄を唱えるべきである。「アッハ」。そうすれば、[すべての印が] 憑依し、友として [実践者と] 共にあることになる。」

H28.)

5. 五如来を身体に入れ、自加持等を行う。(自加持は *Sarvavajrodayā Ādiyoga* 10 に相当。)²²

Tattvālokaḥkāri および *Sarvavajrodayā* の対応箇所を参照するならば, *cittajñānāt samārabhya* で説かれている実践は、仏の智を憑依させることを起点としていることが見て取れる。したがって、*cittajñāna* とは「*citta* の場所である心臓に仏の智を入れること」と考えることが可能である²³。

その一方で、*Śākyamitra* は *cittajñāna*-を五相現等覚の最初のステップ (通達菩提心) であると解釈している。

Kosalālaṃkāra: de la dang *por (D; po P) kho nar de bzhin gshegs
pa'i phyag rgya chen po bsgrub par bshad de | sngar bshad pa'i
cho gas gnas ji lta ba bzhin du 'dug la | 'di dag thams cad ni sems
tsam mo zhes shes pa ni sems rtogs pa ste | 'dis ni sems so sor
rtog pa'i mtshan nyid mngon par byang chub pa'i sngags dang po
ston pa yin no || de nas brtsams te sngags lnga pa'i bar gyis de

²² *Tattvālokaḥkāri* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.1 v.1a: sems rtogs pa nas brtsams nas ni (*cittajñānāt samārabhya*) || zhes bya ba ni rdo rje thal mo dang rdo rje bsdams pa bcings la rdo rje bdams *pa (D; pa'i P) snying gar dral bar bya'o || de nas rdo rje dbab pa bskyed la brtan par byas nas rdo rje skyil mo krung bcas par rdo rje bsdams pa bkan te skyil mo krung la bzhag la | rang gi snying gar rdo rje rtse lnga pa bsams la | bsam gtan dang gzugs med pa'i snyoms par 'jug par mngon du byas nas | yid kyi rang bzhin gyi lus kyi srid pa tha ma pa'i byang chub sems dpa' chen po don thams cad 'grub pa'i sku dang dpyangs dang cod pan gyis dbang bskur ba thob pa 'og min gyi gnas byang chub kyi snying po seng ge'i gdan la bdag nyid bzhugs par bsam par bya'o || de nas rnam par snang mdzad dang | mi bskyod pa la sogs pa'i phyag rgya ji lta ba bzhin du bcing ba'i sbyor bas | om tsi tta pra ti be dham ka ro mi zhes bya ba nas brtsams te | ya thā sa *rba (D; rba P) ta thā ga ta *ta (D; n.e. P) thā a ham zhes bya ba'i bar gyis mngon par rdzogs par sangs rgyas la | de ltar mngon par rdzogs par sangs rgyas nas | dzaḥ hūṃ baṃ hoḥ zhes brjod la yid kyi legs pa'i sbyor bas rnam par snang mdzad la sogs pa de bzhin gshegs pa lnga po mtha' yas pa lus la bcug ste | bdag la byin gyis brlab la sogs pa byas nas | (P ff.163v7–164r5, D ff.144v4–145r2)

²³ 憑依した仏の智が実践者の心臓に入ることについては、種村 2019 を参照。

bzhin gshegs pa thams cad du bdag nyid mngon par rdzogs par
sangs rgyas par byas la | de nas rdo rje nyi ma'i las kyi phyag rgya
bcings te | lhag pa'i thad kar 'od kyi dkyil 'khor bsam mo || (P
f.123v2-5, D ff.105r7-105v2)

【和訳】そこでまずはじめに、如来の大印を成就することを述べる。前述の儀軌により適切な場所に座り、この [世界] すべてが唯心であると理解することが「心を知ること」であり、こ [の文言] により心の観察を特徴とする、現等覚の一番目のマントラ (= om cittapratiavedham karomi) を示している。それから始めて、五つのマントラまでによって、一切如来として自分自身を正等覚させ、次に金剛日のカツマ印を結び、残りの [尊格の] 近くに (?) (lhag pa'i thad kar) 光輪を観想する。

前述したように、Ānandagarbha の註釈においてもここでの次第に五相現等覚が含まれているので、cittajñān-が五相現等覚の第一段階を示している可能性も十分ある。この点について Ānandagarbha は明言はしていない。現時点においては、Ānandagarbha が示す最初の行為である「心臓への智の引き入れ」と「心を知ること」の2つの解釈を提示しておくこととする。

以上の行為を行った後、実践者は自らを毘盧遮那を始めとした如来の身体として観想することになる。Ānandagarbha は当該箇所の意味を「金剛日の光明の輪により間接的に表示されている仏の影像、すなわち毘盧遮那等の如来の身体として観想するべきである²⁴」と述べている。

v.1 に引き続く v.2 は当該大印の成就によりもたらされる効果を述べている。Ānandagarbha による註釈と和訳は以下の通りである。

²⁴ *Tattvālokaṅkāri* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.1 v.1bc: de'i don 'di ston te | rdo rje nyi ma'i 'od *kyi (D; kyis P) dkyil 'khor gyis nye bar mtshan pa'i sangs rgyas kyi gzugs su zhes bya ba rnam par snang mdzad la sogs pa'i de bzhin gshegs pa'i skur bsgom par bya'o || (P f.264r6-7, D f.145r3)

Tattvālokaṅkāṛī ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.1 v.2: ye shes (jñānam) (2b) ni dus gsum la sgrib pa med cing thogs pa med pa'o || tshe (āyus) (2b) *ni (D; 'di P) de bzhin gshegs pa ltar phyi *ma'i (D; ni P) mthar thug pa med par 'tsho ba'o || stobs (balam (2b) ni lus stobs dang | gnas dang gnas ma yin pa mkhyen pa'i stobs bcu la sogs pa'o || na tshod (vayaḥ) (2b) ni *lo (P; n.e. D) bcu drug pa'i cha lugs can gyi gzugs te | de dag thams cad thob par 'gyur ro || kun du *gro ba (P; *bzang po* D) nyid (2c) ni phyogs bcur 'gro ba dang sangs rgyas pa nyid de 'di dag lus de nyid kyis 'thob par 'gyur ro || (P f.164v2-4, D ff.145r6-145v1)

【和訳】「智 (jñānam)」とは三時において妨げられない (sgrib pa med / thogs pa med pa) [智] である。「寿命」とは如来のように、未来が無限である生命である。「力」とは、身体之力と処非処を知る十力などである²⁵。「若さ」とは 16 歳の容貌をもった姿であり、これらのすべてを得ることになるであろう。「遍在性」とは十方向に行き渡ることであり、[それと]「仏の位」の両者が、この身体により得られることになるであろう。

5.1.2. 金剛薩埵を成就する手段としての大印

和訳

[H252-253] 次に金剛薩埵を成就する大印の結びがある²⁶。

²⁵ 原文「gnas dang gnas ma yin pa mkhyen pa'i stobs bcu la sogs pa'o」を文字通り訳せば、「処非処を知る十力など」であるが、処非処智力 (sthānāsthānajñānabala) は十力を構成する項目であるので、チベット語訳が基づいたサンスクリット語写本に corruption があつたか、あるいはチベット語の誤訳である可能性がある。おそらく、gnas dang gnas ma yin pa mkhyen pa la sogs pa stobs bcu'o と emend するべきであろう。

²⁶ このセクションの導入部である文章、そして堀内本におけるセクション分けににもとづいた先行研究において、このセクションと引き続く 5.1.3 を合わせて「金剛薩埵を成就する手段である大印」のセクションとし、金剛王などの尊格の成就法も説いていると述べ

[金剛の] 自我を持って [= 金剛鈴を持ち上げ内側を左脇に置き]²⁷、金剛杵を抽擲し、金剛の自我を持ち上げ [= 金剛杵を胸まで持ち上げ]、金剛のごとき身体・言葉・心をもって自ら金剛薩埵となるべきである。

この [印] によって、遍在する者となり、すべての欲望の主となり、樂を有し、最上の神通・寿命・力・姿を有し、金剛薩埵と同等となろう。

註記

Ānandagarbha によれば、第 1 偈で規定されている実践は以下の通りである。

[第 1 パーダ] [金剛の] 自我を有すること (sagarvam) は、金剛鈴を持った金剛拳にした左手を持ち上げて、その鈴を内側に向け、左脇に置くことで実現するとされる²⁸。[第 2 パーダ] そして右手で金剛杵を抽擲し (vajram ullāya), その金剛杵を心臓 (胸) の部分に持ち上げること (「金剛の自我を持ち上げ

ている (乾 1996: 14, 高橋 1996: (90)). Ānandagarbha の註釈では、本論文で 5.1.3 のセクション番号を付した箇所について、金剛薩埵を成就する手段を金剛王から金剛憑依にいたるまでの尊格に拡大適用 (bsgre ba, *atideśa-) するものと説明している。本論文では、Ānandagarbha の註釈に従い、「金剛薩埵を成就する手段」と「金剛王等を成就する手段」を異なるセクションに分けてある。

²⁷ 先行研究では sagarvam を「誇らしげに」と訳している (高橋 1996: (84), 乾 1996: 14)。これは、辞書に見られる pride という英訳、あるいは「慢」という漢訳によるところが大きいと思われる。garva (garvā という女性形も多く見られる) は、密教の実践において観想の対象となる尊格との一体化を表す語で、同義語として ahaṃkāra という語も使用される。ここで「金剛の自我をもって」と訳しているが、内容的には「金剛と一体となり」ということで、これは Ānandagarbha の註釈からも見て取れることである。また、後の註記に示してあるように、この「金剛の自我を持つ」ことは、金剛鈴を持ち上げ左脇に置く行為で実現される。したがって、sagarvam はこの行為も指し示している。

²⁸ *Tattvālokaṅkāṛī* ad STTS *Vajradhātumahāmāṇḍala* 5.1.2.v.1a: bsgyings bcas rdo rje gsor byed ni (sagarvam vajram ullāya) || zhes bya ba ni bsnyems pas bstod pa'i g-yon pa'i rdo rje khu tshur dril bu dang bcas pa | kha nang du bltas pa g-yon gyi dku'i char gzhaḡ pa des bsnyems pa dang bcas pas na bsgyings bcas so || (P f.164v6–7, D f.145v3)

(vajragarvām samudvahan)」に相当) が、金剛薩埵の身体の印のあり方である。このことにより自分自身に金剛の自我が備わっていると観想する²⁹。[第3 パーダ] 次に、自らが金剛のごとき身体・言語・心をそなえた金剛薩埵となるのであるが、まず身体に関しては、有情結跏趺坐 (sattvaparyāṅka) で座し、金剛薩埵の姿をとって留まることが「金剛のごとき身体」である。言語に関しては、舌の上にフーン字が変化した白い金剛杵を観想し、「金剛薩埵よ！」というマントラ、すなわち金剛薩埵の心髄を唱えることが「金剛のごとき言語」である。そして、身体・言語に関して以上のように観想することが「金剛のごとき心」である³⁰。[第4 パーダ] これによって実践者は金剛薩埵となり得る。

Ānandagarbha は以上の註釈に加えて、実際の観想実践の手順を述べている。

1. 金剛憑依を生じさせ、「金剛薩埵よ！」と心で唱える。
2. すべてのものの無我を観想する。
3. 月輪を観想し、その上に第二の月輪を観想する。
4. 第二の月輪の上に、「金剛薩埵よ！」という心髄を唱えながら五钴金剛杵を観想する。
5. 「私は金剛である」というマントラを唱えながら金剛の自我を生起させる。
6. その同じ金剛杵を、存在を加持するヨーガにより金剛薩埵である自分

²⁹ *Tattvālokaṅkāṛī* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.2.v.1b: de ltar bsgyings pa dang bcas pas rdo rje gsor bar mdzad cing rdo rje de rang gi thugs kar bstod pa'i tshul gyis 'jog par mdzad pa ni | rdo rje sems dpa'i sku'i phyag rgya'i tshul te | bdag nyid *de'i nga (D; *dang* P) rgyal gyi sbyor bas gnas shing bsgom par bya'o || (P ff.164v8–165r1, D f.145v4–5)

³⁰ *Tattvālokaṅkāṛī* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.2.v.1c: sems dpa'i skyil mo krung gis dpal rdo rje sems dpa'i dbyibs kyis gnas pa 'di ni sku'i rdo rje'o || yi ge hūṃ las lce rdo rje rtse lṅa pa dkar po bsam te | ba dzra sa tva zhes zlos pa 'di ni gsung gi rdo rje'o || de ltar bsgoms pa 'di ni thugs kyi rdo rje'o || (P f.165v2–3 D f.145v6–7)

自身であると観想する³¹。

7. 「私は偉大なる誓戒の存在である」というマントラで金剛薩埵の自我を生起させ、金剛薩埵の誓戒印を結び、「私は誓戒である」というマントラで誓戒の存在として観想し、同じ誓戒印と「誓戒の存在よ！私を加持して下さい！」というマントラで自分自身を加持し、大印として観想する。
8. 智慧の存在を誓戒の存在に入れ、自加持などを行う。
9. 供養・敬礼を行い、大印を結び「金剛薩埵よ！」と唱え、自らを金剛薩埵として観想する³²。

³¹ 同様の観想は、Ānandagarbha の別の著作である *Vajrajvālodayā* にも見られる。*Vajrajvālodayā*, section 7: tad vajraṃ sattvādhiṣṭhānayogena vajrasattvo 'ham, vajrasattvo 'ham ity udīrayan vajrasattvam ātmānaṃ niṣpādy (伊集院 2021: 184)。また、「存在を加持するヨーガ (sattvādhiṣṭhānayoga)」という語は、STTS H2206, H2032, H2532, H2696 に見られ、特に H2532 の用例は重要である。伊集院 2021: 193 註 (11) を参照のこと。また同じ用例は大塚 2021: 87–88 でも検討されている。また、sattvādhiṣṭhānayoga は *Vajrajvālodayā* において以下のように説かれている。*Vajrajvālodayā*, section 7: tatrayaṃ sattvādhiṣṭhānayogaḥ | sattvo hi kila sarvātmā mamādhyātmani samsthitāḥ | bhāvato vajrasattvo 'sya sarvajñaḥ praviśet puram || iti (伊集院 2021: 184) 【和訳】「その場合、以下が存在を加持するヨーガである。「すべてを自性とする存在は私の内部にある。この [存在を] 観想することにより (bhāvataḥ) 一切智者が身体に入るであろう。」」

³² *Tattvālokaḥ* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.2.v.1: 'di skad ston pa yin te | rdo rje dbab pa ji lta ba bzhin du bskyed nas | ba dzra sa tva zhes yid la zlos shing chos thams cad bdag med par bsgom par bya'o || de nas zla ba'i dkyil 'khor gyi nram pa de'i steng du zla ba'i dkyil 'khor gnyis pa ste | zla ba'i dkyil 'khor gnyis po de ba dzra sa tva zhes bya ba'i snying po dang bcas pa las | rdo rje rtse lnga pa'o || rdo rje'i dbus su ba dzra sa tva zhes bya ba bkod la | ba dzro ham zhes bya *bas (em.; ba'i P D) rdo rje'i nga rgyal bskyed nas rdo rje de nyid sems *dpar (D; dpa' P) byin gyis brlabs pa'i sbyor bas rdo rje sems dpar bdag nyid nges par bsams la | ma hā sa ma ya sa *tvo (em.; tva P D) ham zhes bya bas nga rgyal bskyed la | rdo rje sems dpa'i dam tshig gi phyag rgya bcings te | sa ma yo ham zhes bya bas dam tshig gi sems dpar bsgoms la | dam tshig gi phyag rgya de nyid dang | sa ma ya sa tva a dhi ti ṣṭha sva *mām (em.; mām P D) zhes bya bas bdag nyid byin gyis brlabs la phyag rgya chen por bsam par bya'o || de nas ye shes sems *dpa' (D; dpar P) ji lta ba bzhin du bcug la | bdag la byin gyis brlabs pa la sogs pa byas nas yang dag par mchod la *phyag (D; phyag rgya P) byas nas phyag rgya chen po bcings la | ba dzra sa tva zhes zlos shing rdo rje sems dpar bdag nyid bsgom par bya'o || (P ff.165r6–165v4, D f.146r2–6)

以上の次第は、大枠としては *Sarvavajrodayā Ādiyoga* 「10. 自加持」のうち、「10. 1. 印の自我の観想-10.2. 誓戒の存在の観想」と一致する。また、用いられているマントラは STTS H301-H303 に典拠がある。(註8を参照。ただし、細部に異なる箇所もあり、この異同が何を意味するのかは検討の必要がある。) *Sarvavajrodayā* の当該箇所と異なる重要な点は、*Tattvālokaṅkāri* の当該箇所には智慧の存在を誓戒の存在に入れるという観想が言及されている点である。周知の通り、智慧の存在と誓戒の存在の合一は、後期密教における成就法において重要な位置を占めることになる。

第2偈は、金剛薩埵の大印の成就により得られる果報について述べている。*Tattvālokaṅkāri* によれば、各果報は以下の様に説明されている。「遍在性 (*sarvagāmī*)」とは一瞬のうちにあらゆる世界に赴き、存在すること。「すべての欲望の主」とは、五感にとって心地よい対象 (つまり *pañcakāmaguṇa*) の享受を主宰すること。そして苦がまったく生じることなく、あらゆる樂が生じることになる。さらに、神通・寿命・力・優れた姿という点で金剛薩埵と等しくなり、その後金剛薩埵の位を得ることになる³³。

³³ *Tattvālokaṅkāri* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.2. v.2: *dis (anayā) ni zhes bya ba la sogs pa la | dpal rdo rje sems dpa'i phyag rgya chen po grub pa 'dis kun tu 'gro ba dang zhes bya ba 'jig rten gyi khams thams cad du skad cig ma gcig gis 'gro zhing phyin par gyur pa dang | 'dod pa kun bdag ces bya ba ni 'jig rten gyi khams thams cad na gnas pa'i 'dod pa'i gzugs dang | sgra dang | dri dang | ro dang | reg bya rnams kyi bdag po ste | nye bar spyod par byed *pa (D; la P) de rnams *kyi (D; n.e. P) gtso bor gyur pa dang | bde ba can dang zhes bya ba 'di la sdug bsgal thams cad mi 'byung zhing bde ba thams cad sbye bar 'gyur te | gang gi phyir bde ba dang ldan par 'gyur ro zhes bshad pa yin no || rdzu 'phrul tshe stobs gzugs mchog rnams || rdo rje sems dpa' 'dra bar 'gyur (rddhyāyurbalarūpāgryō vajrasattvasamo bhavet) || zhes bya ba ni gang gi phyir rdzu 'phrul dang | tshe dang | stobs dang | gzugs kyi mchog rnams rdo rje sems dpa' dang mnyam par 'gyur la | phyis ni rdo rje sems dpa' nyid du 'gyur ro || (P f.165v4-8, D ff.146r6-146v3)*

5.1.3. 金剛王等を成就する手段としての大印

和訳

金剛のごとき身体・言葉・心をもって、描かれた [姿] にしたがって、標識と印を備えた偉大なる諸存在を成就するべきである。

註記

STTS 本文には明示されていないが、ここからは、金剛薩埵の成就法の拡大適用 (atideśa) としての、金剛王から金剛憑依に至るまでの尊格の成就法が説かれる (註 26 を参照)。前セクションの第 2 偈が iti で終わっていることは、この偈頌からトピックが変わることを支持している。

「金剛のごとき身体・言語・心により」は、金剛薩埵の場合の観想法が適用される。Tattvālokarī のチベット語訳は、少しわかりにくいだが、それぞれの存在の標識を手でつかみ (実際の「もの」を使用するか、観想上であるかは不明)、その存在を観想する (金剛王の場合は、鉤をつかみ、金剛王を観想する) というのが、ここでの観想法の骨子のようなものである³⁴。

5.1.4. 大印の成就法、成就、働き

和訳

1. 次にこれに関して、すべての儀軌 (kalpa)³⁵の成就法 (成就の手段)、他ならぬ成就、成就した [印の] 働きを順に説こう。
2. 毎日、適切な時間に、始めに (prāk), 自加持を始めとした [行為] を行い、すべてを成就するべきである。その後は、意のままに [過ごすべきである]。

³⁴ Tattvālokarī ad STTS Vajradhātumahāmaṇḍala 5.1.3: 'di skad ston te dpal rdo rje sems dpa' bsgrub pa dang 'dra bar cho ga thams cad rjes su spyad la | ji ltar ri mo bris pa'i cho gar 'di rnams kyi phyag rgya chen po bri bar gsungs pa de dang rjes su mthun par rdo rje rgyal po la sogs pa 'di rnams kyi mtshan ma | rdo rje lcags kyu la sogs pa lag pas bzung la | rdo rje rgyal po la sogs pa bsgom par bya'o || (P f.166r5–6, D ff.146v7–147r1)

註記

これまで、「すべての如来である存在を成就する手段としての大印」「金剛薩埵を成就する手段としての大印」「金剛王等を成就する手段としての大印」が説かれてきたが、ここからはこれら3つに共通する事項が説かれると考えられる。

第2偈は、大印成就法に至るまでの「前行」的な位置づけである。「毎日」というのは、これらの実践がいわゆる *nityakarman* であることを示している。「適切な時間」は、*catuḥsaṃdhyā*、すなわち日の出、正午、日の入り、夜半のことである³⁶。

「自加持を始めとした[行為] (*svādhiṣṭhānādikam*)」は、先に述べた *Sarvavajrodayā Ādiyoga* のシノプシスのセクション 1-10 に相当する。つまり、この自加持 (*svādhiṣṭhāna-*) は、シノプシスにおける自加持に対応する。*-ādikam* に関しては、*Tattvāloka* *karī* によれば、自加持に先行する部分と考えてよい³⁷。

³⁵ *kalpa* が具体的に何を意味しているのか、經典本文のみから理解するのは難しい。二人の註釈者は異なる見解を示している。*Ānandagarbha* は、すでに説かれている通りの大印であるとしているのに対し、*Śākyamitra* は STTS を構成する *kalpa*、すなわちいわゆる四大品であるとしている。*Tattvāloka* *karī*: *rtog kun gyi zhes bya ba ni ji skyad du bshad pa'i phyag rgya chen po'o* (P f.166r8, D f.147r3). *Kosalālaṃkāra*: *rtog pa kun gyi (sarvakalpānām) zhes bya ba ni *theg (D; thag P) pa chen po mngon par rtogs pa (mahāyānābhisamaya) dang | 'jig rten gsum las rnam par rgyal ba (trailokyavijaya) la sogs pa'o ||* (P f.125r3-4, D f.106v5).

Ānandagarbha の意図するところは、おそらく、5.1.4 で説かれることは、これまで説かれた「すべての如来である存在を成就する手段としての大印」「金剛薩埵を成就する手段としての大印」「金剛王等を成就する手段としての大印」のすべてに共通した成就する手段、成就、働きである、ということであろう。それに対して、*Śākyamitra* はそれらが、金剛界大マンドラ章に限らず、STTS の4つの *kalpa*、すなわち四大品に共通している、ということが言いたいのであろう。

³⁶ *Tattvāloka* *karī* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4. v.2a: *dus bzhin du (yathākālam) zhes bya ba ni snga dro dang nyi ma phyed dang | phyi dro dang | mtshan phyed na'o ||* (P f.166v4, D f.147r6). これらの瞑想実践が *catuḥsaṃdhyā* に行くことは、*Sarvavajrodayā* にも言及されている。*Sarvavajrodayā* (MSK §26): *catuḥsaṃdhyāvasāne ca nāmāṣṭasatapurvakam vidhiṃ kṛtvā visarjayed iti*.

³⁷ *Tattvāloka* *karī* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4 v.2b (H253 v.3b): *rang la byin rlabs sogs de bzhin (svādhiṣṭhānādikam tathā) || zhes bya ba ni | 'di'i 'og dang rgyud gzhan las ji*

Sarvavajrodāyā が規定する自加持の概要は以下の通りである。

心臓にある金剛杵に月輪を觀想し、その上に金剛界大マンドラの諸尊格の標識を觀想する。そしてその標識にそれぞれの尊格の心髓を布置し、「私は鈴である」というマントラから「私は金剛である」というマントラまで唱えながら、印の自我 (nga rgyal, *ahamkāra/garvā) を觀想する。次に、自らを誓

skad bshad pa lta bus rang la byin gyis brlab pa la sogs pa byas nas bya ba nyid yin gyi | ma byas pa ni ma yin no ||

...

'dis ni 'di skad ston pa yin te | gal te dkyil 'khor gyi brtul zhugs rdzogs par byed par 'dod na de'i tshe bdag nyid bsrung ba byas la | khrus la sogs pa'i cho ga thams cad rjes su spyad nas | sdig pa dral ba'i phyag rgyas sdig pa dral bar bya'o ||

de nas de bzhin gshes pa'i rnal 'byor pas rnam par snang mdzad la sogs pa'i skur bskyed de | de'i rigs kyi rnal 'byor pas ni rdo rje sems dpa' la sogs pa'i skur *bsams (D; n.e. P) te | sems so sor rtogs pa la sogs pa'i rim gyis rang gi rnal 'byor bsgoms te bdag nyid rdzogs par byas *la (D; na P) de rnams kyi phyag rgya chen po ji lta ba bzhin du bcings nas nam mkha' dang mnyam pa'i sbyor bas rang gi snying gar stong gsum pa'i sangs rgyas kyi zhing dang mnyam pa'i zla ba'i dkyil 'khor bsams la | rdo rje rgyu'i phyag rgyas rdo rje dbyings kyi dkyil 'khor chen po sprul nas | bdag nyid rdo rje sems dpar bsams te | 'jug pa'i cho gas zhugs la dngos grub kyi rdo rje brtul zhugs kyi bar gyi cho ga bya'o || (P ff.166v4-167r4, D ff.147r6-147v5)

【和訳】「「同様に自加持などを」とは、この後と他のタントラに説かれている通りに、自加持などを行った後に、必ずなすべきなのであって、[自加持などを] 行わずに [なすべきでは] ない。

(中略)

これに関して以下の様に説かれている。もしマンドラの禁戒 (brtul zhugs, *vrata-) を完成させようと欲するならば、自分自身の守護を行い、沐浴などのすべての儀軌に従い、罪障を摧破するための印により罪障を取り払うべきである。

その次に、如来のヨーガ行者は、毘盧遮那などの身体を生起させ、その部族のヨーガ行者は、金剛薩埵などの身体を觀想し、心の洞察を始めとする次第 [=五相現等覺] により、自らの [尊格の] ヨーガを行い、自身として完成して、それらの [尊格の] 大印を適切に結び、虚空と等しくなるヨーガにより、自らの心臓に三千の仏国土と等しい月輪を觀想し、金剛因の印により、金剛界大マンドラを作り出し (化作し)、自分自身を金剛薩埵であると觀想し、入 [マンドラ] の儀軌により、[マンドラに] 入り、成就金剛禁戒 (siddhivajravrata) までの儀軌を行うべきである。」

Ānandagarbha は STTS H301-H303 に対する註釈において「如来の説誦者」と「存在 (菩薩) の説誦者」で觀想法が異なることを述べているが、ここでの「如来のヨーガ行者」は、「如来の説誦者」に対応していると考えられる。伊集院 2021: 168 註 11 を参照のこと。

戒の存在として観想する。引き続き、入マンドラ、すなわち瞑想中に化作した金剛界大マンドラにおいて灌頂を行う。

ここでのポイントは実践者が、マンドラに入る受者であると同時にその受者の本尊 (iṣṭadevatā/svādhidevatā) であることである。つまり、自らが自らを灌頂するので「自加持」ということになる。アーヴェーシャとの関係で付け加えると、この自加持に先立ち、「尊格との合一（アーヴェーシャ）」が行われている点である (上記シノプシスのセクション 8)³⁸。このことは、尊格が実践者にアーヴェーシャしていることが、自加持の前提となることを示していると言える。

「その後は、意のままに [過ごすべきである]」とは、Ānandagarbha によるならば、大印などの観想とマントラの読誦に疲れたら、休息し、印を結ばずにマントラの読誦と観想を行い、その後、倦み疲れることを離れたら、再び印を結び、マントラを唱え、観想を行うことである³⁹。

5.1.4.1. 大印成就法儀軌

和訳

それに関して、以下に大印成就法の詳細な儀軌がある。

1. 規定通りに、金剛憑依を引き起こし、大印を結び、面前に偉大なる存在を観想するべきである。
2. それを知覚して、自らの身体に智慧の存在を観想するべきである。引き寄せ、入れ、結びつけ、制御し、成就させるべきで

³⁸ 上記シノプシスで提示したように、ここでの実践は STTS H299–H300 の規定 (セクションコフォンによれば、sarvamudrāsiddhividhivistarāḥ) に対応する。註 21 を参照。

³⁹ *Tattvāloka*kārī ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4. v.2d: de'i 'og tu ci dgar bya (paścād yathāsukham) || zhes bya ba ni phyag rgya chen po la sogs pa bsgom pa dang | bzlas pas dub na ngal bso zhing phyag rgya ma bcings par yang bzlas pa dang bsgom pa bya ba'o || de nas skyo zhing dub pa dang bral ba na *slar (D; n.e. P) yang phyag rgya bcings la bzlas pa dang bsgom pa bya ba'o || (P f.166v6–7, D ff.147r7–147v1)

ある。

その場合、これらの心髄が[以下の通り]ある。「金剛薩埵よ！アッハ。」金剛憑依の心髄である。「金剛薩埵よ！現れよ！」偉大なる存在の念想 (anusmṛti) の心髄である。「ジャッハ．フーン．ヴァン．ホーッホ．」[これらは順に、]偉大なる存在を引き寄せ、入れ、結びつけ、制御する心髄である。

註記

先に示した *Sarvavajrodayā* の *Ādiyoga* と STTS の対応表によれば、第 1 偈の「vajrāveśaṃ samutpādyā」は、セクション「8. 尊格との合一」に相当し、典拠となる STTS の規定は H299–H300 である⁴⁰。

第 1 偈第 2 パーダ以降、カツマ印の説明までが、*Sarvavajrodayā* *Ādiyoga* のシノプシスにおける「11.1. 存在の観想」および「11.2. 四印による印づけ」に対応する。*Sarvavajrodayā* における当該部分の概要は以下の通りである。

1. 自らの心臓の月輪と一体となると観想。
2. 「誓戒よ！アッハ」と唱え、マンダラ中のすべての尊格の場所に月輪を生起させる。
3. 月輪の上で諸尊格の大印を結ぶ。手順は以下の通り、
 - ・金剛薩埵の場合
 - 3.1. 金剛薩埵の大印を結ぶ。(= STTS 5.1.4.1 v.1bc)
 - 3.2. 面前の虚空にある金剛薩埵の月輪の上で「金剛薩埵よ！アッハ」と唱えて金剛の本性を憑依させる。(= STTS 5.1.4.1 v.1cd)
 - 3.3. 「私は金剛である」と唱えて、金剛薩埵の自我を観想する。(= STTS 5.1.4.1 v.1cd)
 - 3.4. 「私は金剛薩埵である」と唱えて、その自我を白色の金剛薩埵として観想する。(= STTS 5.1.4.1 v.1cd)

⁴⁰ 註 21 および 41 を参照。

- 3.5. その自我を金剛鉤を始めとした四菩薩を用いて、引き寄せ、入れ、結びつけ、制御する。(= STTS 5.1.4.1 v.2)
- 3.6. 金剛薩埵の誓戒印を結び、「金剛薩埵よ！現れよ！」というマントラを唱え、金剛薩埵を見る。(= STTS 5.1.4.1 v.2)
- 3.7. 同じ誓戒印を結び、金剛鉤を始めとした四菩薩を用いて、自らの心臓の月輪に引き寄せ、入れ、結びつけ、制御する。(= STTS 5.1.4.1 prose)
- 3.8. 「汝は誓戒である」というマントラを唱え、背後に月輪を観想する。(= STTS 5.1.4.2 v.1ab)
- 3.9. 「汝は誓戒であり、私である」というマントラを唱え、自らを存在(すなわち、すべての如来)の身体であると観想する。(= STTS 5.1.4.2 v.1cd)⁴¹

⁴¹ セクション 5.1.4.1 v.1 に関して、*vajrāveśaṃ samutpādyā* は、*Tattvālokaḥ* によれば、STTS H229–H300 に説かれている儀軌である。*Tattvālokaḥ* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4.1 v.1a: rdo rje dbab pa byas nas ni (vajrāveśaṃ samutpādyā) || zhes bya ba ni ba dzra ā be sha zhes bya bas rdo rje 'bebs pa'i *dam tshig gi (D; n.e. P) phyag rgya bcings la | *aḥ (em.; a P, āḥ D) zhes bya bas rdo rje rang gi snying gar gzhug go || ... de yang gang gi phyir dang po kho nar rdo rje dbab pa bskyed par 'dod *pas (D; pa'i P) | rdo rje thal mo dang | rdo rje bsdams pa bcings la | rang gi snying gar rdo rje bsdams pa las sor mo dral bar byas nas | rdo rje 'bebs pa'i dam tshig gi phyag rgya bcings la bdag nyid la dbab par bya'o zhes bshad do || de bas na rim pa 'dis rdo rje dbab pa cho ga bzhin du bskyed pa yin no || (P ff.168r8–168v4, D ff.148v7–149r3) 【和訳】「金剛憑依を生起させ」とは、「金剛憑依よ！」という【マントラ】を唱えながら、金剛憑依の誓戒印を結び、「アッハ」と唱えて、金剛を自らの心臓に入れることである。(中略)それは、まず最初に、金剛憑依を生起させることを望むならば、金剛合掌と金剛縛を結び、自らの心臓で [=胸で]、金剛縛 [の状態] から指を解き、金剛憑依の誓戒印を結び、自分自身に [金剛を] 憑依させるべきであると説かれているからである。」

引き続き *mahāmudrāṃ baddhvā* とは具体的には以下の次第になる。*Tattvālokaḥ* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4.1 v.1bc: de nas chos bdag med pa'i sbyor ba nas brtsams te | sems dpar byin gyis brlab pa'i sbyor ba'i mthar thug *pa'i (D; n.e. P) cho ga rjes su spyad par bya'o || de nas dam tshig gi phyag rgya dang | sems dpa' chen po rjes su dran pa'i snying po 'di brjod par bya ste | ma hā sa ma ya sa *tvo (em.; tva P D) haṃ | sa ma yo haṃ | sa ma ya sa tva a dhi ti ṣṭha sva *mām (em.; mām P D) zhes bya bas byin gyis brlabs la phyag rgya chen po bcing bar bya ste | de ltar na *di (D; dir P) ni cho ga bzhin phyag rgya

4. 以上の手順による観想を金剛王から金剛憑依に至るまで行い、諸尊格を身体の所定の箇所には配置し、身体マンドラを観想する。（= STTS 5.1.4.2 v.3）
5. その後、誓戒印、法印、カツマ印、大印を順に用いて「印づけ」を行い、身体マンドラ、すなわち、自らの身体の「尊格化」を完成させる。

このような一連の流れを見ると、身体に尊格を入れ、すなわち憑依させ、身体マンドラを観想し、それを四印で印づけることにより、実践者の身体の尊格化を完成させることが見て取れるのである。四印の役割は、端的に言えば、諸尊格を身体の各パーツに布置する手段であり、それを通して尊格と合一することである。また、四印が単に手段だけでなく、一体化の対象であるであろうことは、先に述べた通りである。

実践次第の概要を見たところで、STTS の本セクションが説いている実践の具体的な内容を見ていきたい。第 1 偈第 2 パーダから第 2 偈で規定され

chen po bcings pa yin no || (P f.168v4-6, D f.149r3-5) 【和訳】「次に、法無我のヨーガから始めて、存在を加持するヨーガに至るまでの儀軌を実行するべきである。次に誓戒印と偉大なる存在を想起する以下の心髄を唱えるべきである。「私は偉大なる誓戒の存在である。」「私は誓戒である。誓戒の存在よ！私を加持したまえ！」以上 [のマントラ] により加持し、大印を結ぶべきである。そのようにすれば、規定通りに大印を結んだことになる。」

「法無我のヨーガ」とは、上記 *Sarvavajrodayā* のシノプシスにある「内的沐浴」に相当する。「存在を加持するヨーガ (sems dpar byin gyis brlab pa'i sbyor ba, sattvādhiṣṭhānayoga)」に関しては、註 31 を参照されたい。

最後に mahāsattvaṃ prabhāyayet とは具体的には以下の次第になる。 *Tattvālokakārī* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4.1 v.1cd: de nas phyag rgya chen po bcings la | ba dzra sa tva *aḥ (em.; a P D) zhes bya bas mdun du zla ba la rdo rje rtse lṅa pa dbab par bya'o || *ba dzro (P; ba dzra D) haṃ zhes bya bas nga rgyal bskyed la rdo rje *de (P; n.e. D) nyid ba dzra *sa tvo (em.; sa tva P D) haṃ zhes bya bas rdo rje sems dpar bdag nyid bsgom par bya ba ste | 'di ni cho ga bzhin zhes bya ba'i sgra gsum pa'i don yin no || (P f.168v6-7, D f.149r5-6) 【和訳】「次に大印を結んで、「金剛薩埵よ！アッハ」という [マントラ] により、眼前の月輪に五鉤金剛杵を憑依させるべきである。「私は金剛である」という [マントラ] により、[金剛薩埵の] 自我を観想し、その同じ金剛杵を「私は金剛薩埵である」という [マントラ] により金剛薩埵である自分自身であると観想するべきである。これが「規定通り (yathāvidhi)」という語の 3 番目の意味である。」

ている所作は、註釈では多少込み入った説明になっているので、対応する *Sarvavajrodayā* の記述を見ていくことにしたい。

Sarvavajrodayā Tib., *Ādiyoga*: de la dang por re zhig rang gi sny-
ing gar zla ba'i dkyil 'khor de gcig tu gyur par bsam mo || de nas
rang gi lus la sa ma ya *aḥ (em.; a P D) zhes zlos shing | lha
thams cad kyi gnas su zla ba'i dkyil 'khor bskyed la | rang gi gnas
na gnas pa'i zla ba'i dkyil 'khor gyi steng du yang rdo rje sems
dpa'i phyag rgya chen po bcings te | sngags de nyid kyis mdun gyi
nam mkha'i phyogs su zla ba'i dkyil 'khor de'i steng du | ba dzra
sa twa *aḥ (em.; a D) zhes bya ba 'dis rdo rje'i bdag nyid du dbab
par byas nas | ba dzro haṃ zhes bya ba 'dis de'i nga rgyal yang
bsgoms la | ba dzra *sa two (em.; sa twa P; sa twā D) haṃ zhes
bya bas de nyid rdo rje sems dpa' sku mdog dkar por bsam mo
|| de la de nyid du rdo rje lcags kyu la sogs pas | dgug pa dang |
gzhug pa dang | bcing ba dang | dbang du byas la | bcom ldan 'das
rdo rje sems dpa' rang gi dam tshig gi phyag rgya dang | ba dzra
sa twa dṛ shya zhes bya ba 'dis blta bar bya'o || *yang (D n.e. P)
dam tshig gi phyag rgya de nyid dang | dzaḥ hūṃ baṃ hoḥ zhes
brjod pas | rang gi snying ga'i zla bar | dgug pa dang | gzhug pa
dang | bcing pa dang dbang du bya'o ||⁴² (P ff.10v7–11r4, D f.9r3–

⁴² *Sarvavajrodayā* の当該箇所にはパラレルな内容が *Kriyāsaṃgrahapañjikā* に見られる。*Kriyāsaṃgrahapañjikā*, *Devatāyoga* in Chapter 6: tatrāḍau tāvat svahr̥ccandraṃḍalam ekībhūtaṃ cintayet. tataḥ svakāye samaya aḥ japan candraṃḍalam paśyet. vajrasatva aḥ. punar api candram. hūṃkāreṇa vajram. vajro 'ham. tatpariṇāmenātmanāṃ vajrasattvaṃ sitavarṇaṃ tadahaṃkāraṃ ca bhāvayet. vajrasattvo 'ham. vajrasattvamahākāyaṃ dṛṣtvā mahāmudrāṃ bandhayet. tataḥ kāyaṃḍalam bhāvayet. oṃ vajrasattva hūṃ pathet. ... ta-syopari cihnaṃ paśyet. vajro 'ham iti yāvat ghaṇṭo 'haṃ paryantam paṭhet. bījacinhapariṇāmena devatāhaṃkāraṃ bhāvayet. bījaḥ, vajrasattvo 'ham iti yāvat vajrāveṣo 'haṃ paṭhet. (E¹, §§81–84, 86, 87)

6)

【和訳】 その場合、まず自らの心臓の月輪が一体となると観想する。次に、自らの身体に「誓戒よ！ アッハ⁴³」と唱え、[マンドラ中の] すべての尊格の場所に月輪を生起させ、それぞれの尊格の場所にある月輪の上でさらに、[諸尊格の大印を結ぶのであるが、金剛薩埵の場合には、] 金剛薩埵の大印を結び⁴⁴ [= mahāmudrāṃ baddhvā (v.1bc) に相当]、その同じ真言を唱え、面前の虚空にあるその月輪の上に、「金剛薩埵よ！ アッハ」と唱えて金剛の本性を憑依させ、「私は金剛である」と唱えて、その自我 (nga rgyal, ahaṃkāra/garvā) を観想し、「私は金剛薩埵である」と唱えて、その [自我] を、白色の金剛薩埵として観想するべきである [= puratas taṃ mahāsattvaṃ prabhāyayet (v.1cd) に相当]。 その場所に [= 自らの心臓にある月輪に] その同じ [印、あるいは自我] を、金剛鉤を始めとする [4 人の尊格] により、引き寄せ、入れ、結びつけ、制御し、世尊金剛薩埵を、[金剛薩埵] 固有の (sva-, rang gi) 誓戒の印 [= 三昧耶印][を結び]、「金剛薩埵よ！ 現れよ！」というこのマントラ [を唱えながら] 見るべきである [= taṃ dṛṣṭvā jñānasattvaṃ tu svaśarīre prabhāyayet (v.2ab) に相当]。 さらに、その同じ誓戒の印を結び「ジャッハ、フーン、ヴァン、ホーッホ」という真言を唱えて、自らの心臓の月輪に引き寄せ、入れ、結びつけ、制御するべきである [= ākṛṣya praveśya baddhvā vaśīkṛtvā ca sādhayet

⁴³ 当該箇所は PD とともに「a」と読んでいるが、ここはアーヴェーシャを引き起こすマントラであると解釈できるので、ah と emend している。Kriyāsaṃgrahapañjikāに見られるパラレルは、この emendation を支持している。

⁴⁴ チベット語訳の原文は、すっきりしない表現となっている。Ānandagarbha には、經典の文章、あるいは先行する論師の著作の文章と思われるものを、そのまま自分の文章に埋め込むという文章スタイルが見られる。当該箇所の「緩い」文章も、おそらくは Ānandagarbha のこのような文章スタイルに起因すると思われる。

(v.2cd) に相当].

偈頌に引き続く散文部分で、上記の実践で使用される心髄 (マントラ) が説かれる。

5.1.4.2. 大印の成就

和訳

1. 「汝は誓戒である」と唱え、背後から月輪を憑依させるべきである⁴⁵。その場所 [= 月輪] で、「汝は誓戒であり私である」と唱えながら自らを⁴⁶存在として (sattvam) 観想するべきである。
2. それぞれの存在の印を (yasya sattvasya yā mudrā tām) 自分自身として観想するべきである。金剛念誦によりすべての印を成就させるべきである。
3. 「ジャッハ。フーン。ヴァン。ホーッホ」と唱えながら、観想上の良きヨーガにより、身体にすべての仏を入れるべきである。[これが] (この偈頌において説かれるものが)、別の [= 第 2 の] 偉大なる成就の手段である。

註記

このセクションでは、観想した大印の成就、すなわち大印との合一が説かれる。3つの偈頌から構成されるが、第1偈は金剛薩埵の成就、第2偈は金剛王から金剛憑依までの尊格の成就、第3偈は身体マンダラの完成について

⁴⁵ āviśet は形の上では使役形ではないが、文脈上使役の意味で解釈するべきである。*Tattvālokaḥ* は「光の輪となった月輪を生起させるか、置くべきである」と註釈している。*Tattvālokaḥ* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.5.2. v.1b: rgyab tu zla ba bsgrubs nas ni (prṣṭhataś candram āviśet) || zhes bya ba ni 'od kyi dkyil 'khor du gyur pa'i zla ba'i dkyil 'khor bskyed pa'am dgod par bya'o zhes bya ba'i don *to (D; te P) | (P f.169v6-7, D f.150r3-4)

⁴⁶ ātmā と第1格の形をとるが、意味の上では第2格として使用されている。

の記述である。

まず第 1 偈に相当する実践の次第について、*Sarvavajrodayā* の相当箇所を以下に示す。

Sarvavajrodayā Tib., *Ādiyoga*: sa ma ya stwaṃ zhes brjod pas |
rgyab tu zla ba grub nas ni || sa ma ya stwaṃ a haṃ zhes brjod
pas | der bdag sems dpa'i lus su bsgom | ba dzra sa twa zhes bya
ba'i snying po dang | om ba dzra sa twa hūṃ zhes bya ba'i sngags
kyang brjod par bya'o || (P f.11r4–5, D f.9r6–7)

【和訳】「汝は誓戒である」という真言を唱えて [= *samayas tvam iti prokte* (v.1a) に相当]、背後に月輪を完成させ [= 観想し] [= *prṣṭhataś candram āviśet* (v.1b) に相当]、「汝は誓戒であり私である」と唱えて [= *samayas tvam ahaṃ bruvaṃ* (v.1d) に相当]、その場所に自らを薩埵の身体として観想し [= *tatrātmā bhāvayet sattvaṃ* (v.1c) に相当]、「金剛薩埵よ！」という心[真言]と「オーン。金剛薩埵よ！フーン」という真言を唱えるべきである。

第 2 偈が述べる金剛王から金剛憑依に至るまでの成就については、*Sarvavajrodayā* は、各段階で使用されるマントラを示しながら、成就法から成就に至る次第をまとめて説いている (*Sarvavajrodayā* *Ādiyoga* のシノプシスの §11.1.2)。

第 3 偈は、いわゆる身体マンドラの完成について説いている。ここでは詳説しないが、*Sarvavajrodayā* はどの尊格を身体のどこに観想するかを説いている (11.1.3)。 *Sarvavajrodayā* では、当該セクションの終結部で以下のように説いている。

Sarvavajrodayā Tib., *Ādiyoga*: de nas rang gi lus dang rdo rje
sems dpa' la sogs pa'i sku la | rdo rje bsdu ba'i phyag rgya bcings

te | dzaḥ hūṃ baṃ hoḥ zhes brjod de || yid kyis legs par sbyor ba
yis || sangs rgyas thams cad gzhus par bya ||⁴⁷ (= STTS *Vajradhā-
tumahāmaṇḍala* 5.1.4.2. v.3abc) (P 12v5–7, D f.10v4)

【和訳】次に自らの身体と金剛薩埵などの身体に、金剛集会の印
を結び、「ジャッハ．フーン．ヴァン．ホーッホ」と唱え、観想
上の良きヨーガにより、すべての仏を入れるべきである。

STTS 本文で「[これが] 別の [=第 2 の] 偉大なる成就の手段である」と説
かれているが、*Tattvālokarī* には、大印の成就法に関して、いくつかのヴァ
リエーションが説かれている。これらの成就法の違いには *yoga* (rnal 'byor),
anuyoga (rjes su rnal 'byor), *mahāyoga* (rnal 'byor chen po) として説かれてい
る。その場合、*yoga* と *anuyoga* は (おそらくは「阿闍梨」のステータスを保
持する) 実践者および弟子に対して、そして *mahāyoga* は阿闍梨に対して説
かれているようである⁴⁸。これら *yoga*, *anuyoga*, *mahāyoga* の違いがどこに
あるのか、また金剛頂経系の密教において「弟子」と「阿闍梨」のステータ
スの違いは何によって決まるのかは不明なところが多い。その解明は今後の
課題としたい⁴⁹。

⁴⁷ *Kriyāsaṃgrahapañjikā* にパラレルな箇所がある。 *Kriyāsaṃgrahapañjikā*, *Devatāyoga* in Chapter 6: svakāye vajrasattvādikāye ca samājamudrāṃ baddhvaivaṃ vadet. jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ. manasā sādhu*yogena(em. following Ms B; -*prayogeṇa* E¹ sarvabuddhān praveśayet (E¹, §89).

⁴⁸ *Tattvālokarī* ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.5.2. v.3: de ltar rang gi slob ma rnams kyis rnal 'byor dang | rjes su rnal 'byor bshad nas slob dpon rnams kyis dkyil 'khor bsgrub pa dang | rang gi lha bsgrub pa'i rnal 'byor chen po'i cho ga brjod par bya ste | (P ff.171r8–171v1, D f.151v3–4)

⁴⁹ Bu ston による *Sarvavajrodayā* に対する註釈書 *Yid bzhin kyi nor bu* は、内的沐浴から四印による印づけ (本論文におけるシノプシスの 1 から 11.2.4 まで) が *mahāyoga* であり、それ以降が *ādiyoga* であると説いている (伊集院 2016)。但し、*Sarvavajrodayā* 自体には、そのような明確な区別が見られるわけではないので、本論文ではシノプシスで示した全体を「広義の」*ādiyoga* であると解釈しておきたい。また、註釈書にこのような区分が見られることは、*Sarvavajrodayā* で説かれている実践が、常に全体としてセットとして実践されていたわけではなく、実践者の目的や資質に応じて部分的に実践されていた可能

5.1.4.3. 大印の働き

和訳

1. 次にそれらの [大] 印の働きを説こう。[それは、] 無上の金剛の働きである。

[五如来]

仏の念想⁵⁰を完成した [実践者] は、迅速に仏の位を獲得することができる。

[四波羅蜜]

2. Sattvavajrī により成就すればすべての印の主⁵¹となるである

性は大いにありうる。

Sarvavajrodāyā の構成を Ānandagarbha の別の著作である **Trailokyavijayodayā* の構成と比較してみた場合、後者は「一つのヨーガ (rnay 'byor gcig, *ekayoga)」を自加持の後の mahāyoga に代わるオプションとして説いている。mahāyoga では Trailokyavijayamahāmaṇḍala の二十八尊の大印を完成し、四印を実践するのに対し、「一つのヨーガ」では、それを Vajrahūmkāra のみに対して行うことに違いがある。この **Trailokyavijayodayā* における mahāyoga は、*Sarvavajrodāyā* における大印の完成と四印による印づけ (シノプシスの §§11.1–11.2) に対応すると考えられる (伊集院 2015 を参照)。

実践者のステータスに関しては、実践者が入門時に授かる律儀 (saṃvara) により異なる可能性が考えられる。Abhayākara Gupta は *Vajrāvalī* において、入門時に授かる律儀には sāmānyasaṃvara と ācāryasaṃvara の違いがあり、前者を授かった弟子は個人的な礼拝実践が可能になり、後者を授かった者は阿闍梨として入門儀礼や pratiṣṭhā 儀礼といった「利他行」を行うことができることを説いている (E^M §20. Śiṣyādhivāsanavidhi = E^S pp.445–449. 和訳に関しては、桜井 1996:316–322)。

⁵⁰ Ānandagarbha によれば、buddhānusmṛti とは五如来の大印の観想である。Tattvālokaṅkāṛī ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4.3. v.1c: *sangs rgyas (D; sang rgyas kyi P) rjes su dran grub na || sangs rgyas nyid du myur du 'gyur (buddhānusmṛtisamsiddhā) || zhes bya ba ni de bzhin gshegs pa lnga'i phyag rgya chen po bsgom pa ni | sangs rgyas rjes su dran pa ste | (P f.172v5–6, D f.152vr7)

⁵¹ Ānandagarbha によれば、sarvamudrādhīpa とは金剛薩埵のことである。Tattvālokaṅkāṛī ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4.3. v.2 b: lus de nyid kyis phyag rgya kun gyi bdag po rdo rje sems dpar 'gyur ro || (P ff.172v8–173r1, D f.153r2)

う。一方, Ratnavajrī の印の場合には, すべての宝の主⁵²となるであろう。

3. Dharmavajrī により成就すれば, 仏の法を持する者となろう。
Karmavajrī (あるいは Karmavajriṇī)⁵³により金剛の行為を行う者となろう。

[金剛部族]

4. 結ばれた存在の印により, 金剛薩埵が成就するであろう。金剛の引き寄せを用いることで, 持金剛たち⁵⁴を引き寄せることができる,

5. 金剛愛 (vajrarāga-) の大印はすべての仏に愛欲を起こさせることができる。金剛善 (vajrasādhū-) を用いることですべての仏たちを満足させることができる。

[宝部族]

6. 宝の印の儀軌は仏の諸灌頂を与えることができる。金剛光を用いることで, 迅速に金剛光となることができる。

7. 金剛の旗を持する者 [の大印] を用いれば (sevya), 望みを満たすことができるようになる。金剛笑の儀軌を用いれば, すべ

⁵² Ānandagarbha によれば, sarvaratnādhipa とは Ākāśagarbha のことである。Tattvālokaḥ ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4.3. v.2d: rin po che'i rigs thams cad kyi bdag po nam mkha'i snying por rnal 'byor *pa (D; de P) de 'gyur ro || (P 173r2, D f.153r3-4)

⁵³ テキストは韻律上の理由から, Karmavajrin という男性あるいは中性の形を使用しているか, あるいは Karmavajriṇī を Karmavajriṇi としていたと考えられる。Cf. E^H p.151, 註 4.

⁵⁴ STTS のサンスクリット語写本の読みは vajradharām である。Buddhist Hybrid でも -ām が男性・複数・対格で見られるので, Aiśa/Ārṣa として解釈した。Ānandagarbha は諸仏を引き寄せることと説明している。Tattvālokaḥ ad STTS *Vajradhātumahāmaṇḍala* 5.1.4.3. v.4cd: rdo rje 'dren pa'i cho ga yis (vajrākarṣaprayogataḥ) || zhes bya ba ni rdo rje rgyal po'i phyag rgya chen bo'i sbyor ba ste | des rdo rje 'dzin pa'i las zhes bya ba sangs rgyas 'dren zhing 'gugs par 'gyur ro || (P f.173v1-2, D f.153v2).

ての仏と同じように笑うことができる。

[蓮華部族]

8. 金剛法 [の大印] を用いれば、金剛法⁵⁵を持する者となろう。
金剛利 [の大印] を用いれば、すべての仏たちの最上の智慧 [を
獲得することができる]。
9. 金剛輪を持する者 [の大印] を用いれば、法輪を転ずることが
できる⁵⁶。金剛語 [の大印] を用いれば、仏の言葉の成就を得る。

[カツマ部族]

10. 金剛の最上の行為を成就することで、迅速に金剛業となる
であろう。金剛の甲冑を纏えば (nibadhya), 金剛の身体を持つ
者となろう (vajrakāyatvam āpnuyāt).
11. 金剛ヤクシャを成就すれば、金剛ヤクシャと等しくなるこ
とができる。金剛拳を結ぶことで、すべての印が成就する。

[八供養]

12. 金剛の妖艶な踊りを成就すれば、偉大なる金剛の快樂を得
ることができる。金剛の華鬘を纏えば、すべての仏の灌頂を授
けることになる。
13. 金剛歌 [の大印] を用いれば、金剛の歌を用いることができ

⁵⁵ Ānandagarbha によれば, vajradharma とは不二の三昧 (不二智を対象とする三昧) のことである。Tattvālokaṅkāṛī ad STTS Vajradhātumahāmaṇḍala 5.1.4.3. v.2d: rdo rje chos ni gnyis su med pa'i ting nge 'dzin ! (P f.174r1, D f.154r1).

⁵⁶ 山田は、漢訳・チベット語訳が sa varatayet→pravartayet の emend を指示しているとしている。確かに代名詞 sa に対応する語は、二つの漢訳およびチベット語訳の中に見いだすことはできない。しかしながら、このことだけをもって emendation を指示する議論としては弱いと言わざるを得ない。むしろ, dharmacakram pravartayet という表現が STTS 本文中に見いだせる (H292, H295) という internal evidence の方が⁵, この emendation を指示する論拠となり得よう。

る。金剛の踊り [の大印] を用いれば、すべての仏たちにより彼は供養される。

14. 金剛焼香女 [の大印] を用いれば、すべての人々を喜ばせることができる。金剛華 [の大印] を用いれば、彼 [=実践者] は人々を制御することができる。

15. 金剛光明の大印により、[仏を?] 供養すれば、[その大印が、天] 眼を与えるであろう⁵⁷。金剛塗香 [の大印] を用いれば、す

⁵⁷ vajrālokāmahāmudryā に関して、写本の読みは vajrālokāmahāmudrā であり、E^H E^Y ともに写本の読みを採用している。本校訂テキストでは、STTS チベット語訳および二本の漢訳にもとづき、vajrālokāmahāmudryā と emend している。STTS Tib.: rdo rje snang ba'i phyag rgya **ches** || rab mchog mig ni sbyin par byed || (P f.34r2=3, D f.131r5); STTS Ch1: 由金剛燈印供養故獲眼 (220c17); STTS Ch2: 金剛燈明大印契 以供養故得淨眼 (356b12)。また *Tattvālokakarī* の pratika および註釈部分も vajrālokāmahāmudryā の読みを支持している。Tattvālokakarī: rdo rje snang ba'i phyag rgya ***ches** (P; che D) (vajrālokamahāmudryā) || zhes bya ba ni mar me'i phyag rgya chen po gang yin pa **des** na | rab mchog mig ni sbyin par byed (cakṣur dadyāt prapūjayan) || ces pa ***des** (D de P) mchod par 'os pa'i mig thob par 'gyur ro || (P ff.174v8-175r1, D 154v6)。さらに、このセクションの他の偈頌を見ても、mudrā は第 1 格で用いられることはなく、第 5 格、第 6 格、あるいは動詞 yuj などの目的語として使用されており、意味の上から見ても第 3 格となるのが適切である。また -mudrā と -mudryā は文字の形からみても混同しやすいものである。

その一方で、*Kosalālamkāra* を参照するならば、vajrālokāmahāmudrā の読みを取るのも可能かもしれない。*Kosalālamkāra*: rdo rje snang ba'i phyag rgya ches || zhes bya ba la | stong pa nyid kyi ye shes kyi rdo rje snang ba ni rdo rje snang ba ste | des nye bar mtshon pa'i lha mo gang yin pa de la yang rdo rje snang ba zhes bya ba'i *sgra (D; sgrar P) brjod do || de'i phyag rgya chen po bsgoms shing *bsten (bstan na?) lha'i mig 'thob par 'gyur ro zhes bya ba'i don to || de bzhin gshegs pa rnams la | rdo rje snang ba'i phyag rgya chen pos(1) rab tu mchod na (prapūjayan) | rdo rje snang ba'i phyag rgya chen po de nyid mig sbyin par byed pa la byed pa po yin par ston to(2) ||(P f.152v2-4, D f.113r2-4) 【和訳】「金剛光明の大印により」で始まる箇所に関して、空性の智である金剛の光明が「金剛光明」であり、それにより間接的に表示された女尊についても「金剛光明」という語が述べられている。その大印を修習し、奉仕するならば、天眼を獲得する、という意味である。如来たちを金剛光明の大印で「供養するならば」他ならぬその金剛光明の大印が眼を与えるということに関して、行為主体 (byed pa po, kartṛ) であると示しているのである。」この引用において (1) が偈頌の言い換えであれば、vajrālokāmahāmudryā の読みを支持していると考えられる。また (2) を考慮に入れるならば vajrālokāmahāmudrā を支持しているとも考えられる。本校訂テキストでは vajrālokāmahāmudryā という読みを採用しているが、

べての苦を払うことができる。

[四摂]

16. 金剛の鉤で引き寄せれば、最高のすべてを引き寄せる者になる。金剛索 [の大印] を用いれば、すべてを [目的の場所に] 入らせることができる。

17. 金剛破裂 (鎖) [の大印] を用いれば、すべてを拘束することが可能となる。金剛憑依 [の大印の] 儀軌を実行すれば、あらゆるものの憑依を成就する者となる。

註記

このセクションでは金剛界大マンドラの諸尊の大印の成就の結果、実践者が得ることのできる果報が説かれている。内容から判断して、v.1 の karma は「働き」と訳している。これらの果報は、仏位といった mukti に関わるものだけでなく、bhukti に関わることも意図されていると考えられる。

4 終わりに

以上、STTS の「金剛界大マンドラ」章に規定されている大印の儀軌を、主として Ānandagarbha の註釈書および金剛界大マンドラ儀軌である *Sarvavajrodayā* を参照しながら、校訂テキストおよび訳註を提示し、その内容を検討してきた。実践次第の具体的内容に加えて、註釈書および儀軌を通して以下の事柄が確認できた。

1. 大印の実践の前提、あるいは出発点としてアーヴェーシャがある。
2. 大印を含む四印は、仏 (あるいは仏の智) の身体・言葉・心・行為を象

vajrālokāmahāmudrā という写本の読みが本来の読みである可能性があることも指摘しておくこととする。

- 徴するものであり、また、実践者が合一する対象となるものである。
3. 四印は必ずしもセットで用いられるものではなく、それぞれ単独での使用、成就も想定されている。
 4. 四印の実践に関しては、金剛界大マンダラの各尊格の成就も想定されているようである。
 5. 大印の成就法に関しては、ヨーガ、アヌヨーガ、マハーヨーガといったオプションが用意されている。そして、このオプションは、実践者のステータス(あるいは能力・資質?)と関係していると考えられる。これに関しては、不明な点も多く、その解明は今後の課題である。

本論文では、*Tattvālokaḥ* および *Sarvavajrodayā* を適宜参照してきたが、実践の手順の複雑さなどもあり、註釈書での議論の流れを提示できていない。その点、読者には読みにくい点多々あるのではないかと恐れている。近い将来に当該箇所(註釈書)の和訳註を提示することで、本論文の内容を補いたいと考えている。

参考文献

一次資料

サンスクリット語文献

Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā. E^T = Toru TOMABECHI (ed.) *Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā: Sanskrit and Tibetan Texts*. Beijing: China Tibetology Publishing House/Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2009. Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, No.5.

Kriyāsaṃgrahapañjikā by Kuladatta. E^I = 乾仁志. 1992. 「Kriyāsaṃgraha の本尊瑜伽 — 梵文テキスト (中) —」『高野山大学密教文化研究所紀要』5, pp.160–133.

Pradīpodyotana. A ṭīkā on the Guhyasamājatantra by Candrakīrti. C^{ED} = Ch. CHAKRAVARTI (ed.) *Guhyasamājatantrapradīpodyotanaṭīkāṣaṭkoṭivyaṅkhyā* (sic), Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1984. Tibetan Sanskrit Works Series 25.

Vajrajvālodayā by Ānandagarbha. See Ijuin 伊集院 2021.

Vajrāvalī by Abhayākara Gupta. E^M = Masahide Mori (ed.) *Vajrāvalī of Abhayākara Gupta: Edition of Sanskrit and Tibetan Versions*. 2 vols. Buddhica Britannica Series Continua XI. Tring: Institute of Buddhist Studies, 2009. E^S = 桜井 1996.

Sarvathāgatatattvasaṃgraha (= STTS). Ms = Manuscript preserved in Kaiser Library, Kathmandu. KL Acc. No. 143, KLD No. 108. E^H = 堀内寛仁. 1983. 『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究：梵本校訂篇上 — 金剛界品・降三世品』高野山・密教文化研究所. E^Y = YAMADA, Ishi. 1981. *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha nāma mahāyāna-sūtra: A Critical Edition Based on a Sanskrit Manuscript and Chinese and Tibetan Translations*. New Delhi, 1981. Śāta-piṭaka Series Volume 262.

Sarvavajrodayā by Ānandagarbha. Ed^T = 密教聖典研究会. 「Vajradhātumahā-
maṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya — 梵文テキストと和訳 — (I)」『大正大学
総合佛教研究所年報』8, pp.258-224 = pp.(23)-(57).

チベット語文献

rDo rje dbyings kyi dkyil 'khor chen po'i cho ga rdo rje thams cad 'byung ba.

Translation of Ānandagarbha's *Sarvavajrodayā* Ota. No. 3339, *rgyud 'grel*,
vol.*shi*, ff.1-57v8; Toh. No. 2516, *rgyud*, vol.*ku*, ff.1r1-50r4.

rGyud kyi don la 'jug pa. Translation of *Buddhaguhya's *Tantrārthāvatāra*.

Ota. No. 3324, *rgyud 'grel*, vol.*dzi*, ff.1-98v7; Toh. No. 2501, *rgyud*, vol.*i*,
ff.1r1-91v6.

rGyud kyi don la 'jug pa'i 'grel bshad. Translation of the *Tantrārthāvatāra*-

vyākhyāna, a commentary on the *Tantrārthāvatāra*, by Padmavajra. Ota.
No. 3325, *rgyud 'grel*, vol.*dzi*, ff.98v7-382r8; Toh. No. 2502, *rgyud*, vol.*i*,
ff.91v6-352r7.

De kho na nyid bsdus pa'i rgya cher bshad pa ko sa la'i rgyan. Translation

of the *Kosalālamkāra*, a commentary on the *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*,
by Śākyamitra. Ota. No. 3326, *rgyud 'grel*, vol.*wi*, 1-vol.*zhi*, f.230r6; Toh.
No. 2503, *rgyud*, vol.*yi*, f.1r1-vol.*ri*, f.202r5.

De bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsdus pa. Translation of

Sarvatathāgatatattvasaṃgraha. Ota. No. 112, *rgyud*, vol.*nya*, ff.1v1-162v2;
Toh. No. 479, *rgyud*, vol.*nya*, ff.1v1-142r7.

De bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsdud pa theg pa chen po mn-

gon par rtogs pa zhes bya ba'i rgyud kyi bshad pa de kho na nyid snang bar
byed pa. Translation of the *Tattvālokarī*, a commentary on the *Sarvatathā-*
gatatattvasaṃgraha, by Ānandagarbha. Ota. No. 3333, *rgyud 'grel*, vol.*śi*,
f.1-vol.*i*, f.417r7; Toh. No. 2510, *rgyud*, vol.*li*, f.1r1-vol.*shi*, f.317r7.

gSang ba rnal 'byor chen po'i rgyud rdo rje rtse mo. Translation of the *Va-*

『真実摂経』『金剛界大マンドラ』章所説の大印の実践（種村）

jraśekhara tantra. Ota. No. 113, *rgyud*, vol.*nya*, ff.162v2–301v8; Toh. No. 480, *rgyud*, vol.*nya*, ff.142v1–274r5.

漢訳文献

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經. 不空訳. Taisho No.865. = STTS

Ch1

佛説一切如來眞實攝大乘現證三昧大教王經. 施護訳. Taisho No.882. = STTS

Ch2

二次資料

和文資料

伊集院 栞. 2015. 「Ānandagarbha 著『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌について」『印度學佛教學研究』64-1, pp.435–432 = pp.(90)–(93).

伊集院 栞. 2016. 「『一切金剛出現』の前行儀軌について」『密教文化』236, pp.164–147 = pp.(95)–(112).

伊集院 栞. 2021. 「アーナンダガルバ著 *Vajrajvāloḍayā* — 内容概観および「ヨーガのみによる成就法の手引き」説示箇所梵文テキストと註 —」『川崎大師教学研究所紀要』6, pp.(165)–(199).

乾 仁志. 1996. 「『初会金剛頂經』所説の四印について」『密教学研究』28, pp.13–34.

遠藤祐純. 2013. 『『タントラ義入』和訳全：Buddhaguhya による金剛頂經要解』東京・ノンブル社. 蓮花寺仏教研究所研究叢書.

遠藤祐純. 2014. 『Ānandagarbha 造『Tattvāloka』「金剛界品」金剛界大曼荼羅和訳』東京・ノンブル社. 蓮花寺仏教研究所研究叢書.

遠藤祐純. 2015. 『Śākyamitra 造『Kosalālaṅkāra』「金剛界品」金剛界大曼荼羅和訳』東京・ノンブル社. 蓮花寺仏教研究所研究叢書.

遠藤祐純. 2017. 『パドマヴァジュラ造『タントラ義入註釈』和訳』東京・ノ

- ンブル社、蓮花寺仏教研究所研究叢書。
- 大塚恵俊. 2021. 「『理趣経』「大楽金剛秘密」における *svavajrasattva について」『仏教学』 62, pp.(75)–(96).
- 壁瀬灌雄. 1957. 「Buddhaguhya に於る Tattva の自性と相」『日本仏教学会年報』 22, pp.117–141.
- 北村太道. 2016.. 『初会金剛頂経概論『タントラ義入』の研究: ブッダグヒヤ本論・パドマヴァジュラ註釈の全訳と解説』 浦安・起心書房.
- 北村太道, タントラ仏教研究会. 2012. 『全訳金剛頂大秘密瑜伽タントラ』 浦安・起心書房.
- 桜井宗信. 1996. 『インド密教儀礼研究 — 後期インド密教の灌頂次第 —』 京都・法蔵館.
- 高橋尚夫. 1987. 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現: 第一瑜伽三摩地品 — 和訳 —」『密教文化』 161, pp.150–113.
- 高橋尚夫. 1996. 「『初会金剛頂経』における「金剛薩埵成就法」について」『仏教学』 38, pp.(81)–(103).
- 高橋尚夫. 1998. 「アーナンダガルバの金剛界成就法について」『仏教教理・思想の研究: 佐藤隆賢博士古稀記念論文集』 pp.85–110.
- 種村隆元. 2019. 「*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* における āveśa について」『密教学研究』 51, pp.31–53.
- 種村隆元. 2020. 「*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* の説く āveśa 儀礼 — 金剛界大マンドラ章「成就が生じるための印に関する智」校訂テキストおよび和訳注 —」『智山学報』 69 (本多隆仁先生古稀記念論集 摩訶衍の世界), pp.(71)–(97).
- 宮坂宥峻. 2022. 「理趣経に見る四種印智について」『智山学報』 71, pp.(45)–(59).

『真実摂経』『金剛界大マンダラ』章所説の大印の実践（種村）

欧文資料

SMITH, Frederick M. 2006. *The Self Possessed: Deity and Spirit Possession in South Asian Literature and Civilization*. New York: Columbia University Press.

< キーワード > *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*, *mahāmudrā*, *āveśa*, *Tattvālokaḥ*, *Sarvavajrodayā*

本研究は JSPS 科研費 18K00063, 19H00523 の助成を受けたものである。